１　研究主題　「図書館サービスのこれから～情報と交流の拠点をめざして～」

２　趣　　旨

　これまでの図書館は常に「時代の変化や地域社会の要請に応える図書館」をめざして、「これからの図書館とは何か」を問い続けてきた。その中で、このたび、デジタル時代の図書館サービスと、情報・文化・交流の拠点としての図書館サービスに着目して、“図書館サービスのこれから”を研究することとした。

　出羽の国山形は、山岳信仰で有名な出羽三山や母なる川最上川などの自然環境の中で、東北でも独特の文化を育んできた伝統ある土地柄である。このような豊かな風土に恵まれた北国の地において、先端技術で歴史や文化を伝え、図書館を交流の拠点として読書活動を推進する取り組みについて協議するため開催するものである。

３　主　　催　　社団法人日本図書館協会公共図書館部会
　　山形県教育委員会・山形県図書館協会・北日本図書館連盟

４　主　　管　　山形県立図書館

５　期　　日　　平成２５年１０月２４日（木）・２５日（金）

６　会　　場　　村山市総合文化複合施設「甑葉（しょうよう）プラザ」
　　山形県村山市楯岡五日町１４―２０　℡０２３７－５５－２８３３

８　日　　程

第１日〔１０月２４日（木）〕

12:00	13:00	13:20	14:50	15:00	17:00	17:20	19:30
	受付	開会式	基調講演	休憩	事例発表	移動	情報交換会

第２日（１０月２５日（金）〕

9:00	9:10	11:00	11:10	11:30	11:50	12:50	13:20
受付	全体会（ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ）	休憩	情勢報告	閉会式	昼食	図書館見学	

（１）基調講演

演　題　「図書館サービスのこれから ～情報と交流の拠点をめざして～」

講　師　NPO 法人オブセリズム代表　　花井　裕一郎　氏

（前長野県小布施町立図書館長）

（２）事例発表

①〔デジタル時代の図書館サービス〕

秋田県立図書館情報サービス班　主査　　嵯峨　　進　氏

②〔北摂アーカイブスについて ～地域の記憶を記録するということ～〕

大阪府豊中市立岡町図書館　司書　　西口　光夫　氏

③〔「読書シティ宣言」のまち、村山市 ～交流と学習の拠点として、独自のイベントや仕組みを考案～〕

山形県村山市商工文化観光課　課長補佐　奥山　典子　氏

（前山形県村山市立図書館業務主査）

④〔まち・人・オガール ～新しい図書館の役割～〕

岩手県紫波町図書館　主任司書　　手塚　美希　氏

（３）全体会（パネルディスカッション）

「図書館サービスのこれから ～情報と交流の拠点をめざして～」

① コーディネーター

花井　裕一郎　氏　(NPO 法人オブセリズム代表)

② パネリスト

嵯峨　　進　　氏　(秋田県立図書館情報サービス班　主査)

西口　光夫　　氏　(大阪府豊中市立岡町図書館　司書)

奥山　典子　　氏　(山形県村山市商工文化観光課　課長補佐)

手塚　美希　　氏　(岩手県紫波町図書館　主任司書)

③ 助　言　者

社団法人日本図書館協会　常務理事　山本　宏義　氏

（４）情勢報告

社団法人日本図書館協会　常務理事　山本　宏義　氏

９　参加者数　３７６名

＜基調講演＞

「図書館サービスのこれから～情報と交流の拠点をめざして～」

ＮＰＯ法人オブセリズム　ＣＥＯ　花井　裕一郎氏

〇講師紹介

1962 年　福岡県筑豊生まれ。

1989 年～1994 年　フジテレビジョンで番組演出。

1994 年～1996 年　ＮＨＫ･ＴＢＳ･日本テレビ･東芝ＥＭＩで番組等を演出。

2000 年～　長野県小布施町を拠点として数々の文化活動に携わる。

2009 年 7 月～2012 年 11 月　小布施町立図書館「まちとしょテラソ」館長。

現在、ＮＰＯ法人オブセリズムのＣＥＯとしてご活躍中（小布施町での活動をまとめた「はなぼん～わくわく演出マネジメント～」を出版）

〇　自己紹介

改めまして、こんにちは。花井と申します。いま僕の「はなぼん」を紹介していただきありがとうございます。

はじめに山形県、今年もう何度も来ておりまして、山形市に友人もいますし、いろんなことで来させていただいているのですが、今日は、やっぱりすごく嬉しいなと思ったのは、すごくきちんとされている。僕の名前の花井の花というのは、草冠の真ん中が開きます。名刺もそのようにしているので、そうしていただいていると思うのですが、なかなか気付いていただけなくて、草冠がつながっている花をご準備いただけることがあります。本当に小さなことなのですけれども、ご準備された方々が、今日皆さんにも配られました資料をはじめ、懸垂幕など、「花」の草冠の真ん中を開けていただき、心配りを細部までしていただけるというのはすごく嬉しいことだなと思って、先ほど着きまして、すぐに気がつき微笑んだという次第です。

僕は紹介であったように、昨年 11 月で「まちとしょテラソ」の館長を満期で終了し、それからどうしようかなと思った時に「東北へ行こう」と。それまでも、気仙沼にはずっと足を運んでいたのですが、「東北で何かお手伝いすることがあればなあ。東北を少し回ってみよう」と思った時に来たのが岩手県でした。岩手県に入りいろいろ回りながら山形県に辿り着き、「ちょっとお話を」と思って県立図書館へ足を伸ばしたところ、別に営業しに来た訳ではなかったのですが、丁度僕の本を読んでいただいていて、僕に「返事は明日でも結構なので基調講演をお願いしたい」という話でした。大変有難く、僕はその場ですぐに「お受けいたします」ということで、今日の話がトントントンと決まりまして「いやあ、来てみるものだな」と思ったところです。

今は、図書館やまちづくりについて、全国を回らせていただきます。僕の話の中に本が出てきます。本とサービス、そして人とか物とかがうまく繋がっていけばいいなと思っています。

「情報」と「交流」、この言葉を図書館が、「キーワード」あるいは「理念」の中に入れているところが多くなっています。だから、僕を呼んでいただけたと思うのですが、じゃあそれをどのように組み合わせていくのかが分からないとか、どうしていくと良いのかという方々がいらっしゃるのかなと思っております。それについて、僕達はすごく大事にしている言葉があります。まずそれからご紹介したいと思います。

〇　公共図書館が抱える課題

「ないのにある」。これを僕が演出する中で、すごく大事にしている言葉です。目の前には見えないけれど、何かそこにはエネルギーがあったり、気配があったり、歴史があったり。

先程、村山市長さんの話から「村山にはそんなに何もないけど、実は蕎麦があるよ」とか、「日本酒「十四代」があるよ」とか。そこにはあるんだという気配感みたい

なものを伝える。そして可視化していくというのが、演出をするということの一つのキーワードだと思います。

よく田舎に行くと「ほんとに何もないのに良く来たね」とか言われるんですが、実は外から行くと、たくさん良いものがあります。自然だったり、食べものだったり。それって気付かれていない人が多い。特に自分がすごく輝いている人なのに「私は何もできない」とか思っている人がいるんですね。図書館の中にもたくさんいる。そういう人達を「いや、あなたは素晴らしい。こうこうこうで素晴らしいんだよ」とちゃんと可視化してあげるのが僕達演出家の仕事、特にそれはお客さまに対して可視化しなければいけない。その言葉として「ないのにある」という言葉を大事にしています。でも反対に「あるのにない」という言葉もある。これは行政の人は耳を塞いでくださいね。箱物行政とよく言われることですけれども。「造ったけど中身がないね」というところを箱物行政とよく言われてしまいますが、それは普通の企業でも一緒だと思いますし、何の理念もなく「何か造ったんだけど、じゃあそこから何をしようか」ではなくて、造る前から「何をしようか」でなくてはならない。なので、「目的も何もなくて、何かを造ってしまった。そこには魂が入っていない」そこには絶対に陥らないように、肝に銘じて「ないのにある」を探し続けなきゃいけないのではないかなと思います。それがまちづくりの一つのポイントだと思っています。

冒頭に僕の事を紹介していただきましたが、僕は演出家として、演出の仕事を20数年やってきたのですが、そこにプラスまちづくりの演出というのをここ10年位やらせてもらいまして、約30年間演出家業を続けております。

現在、岩手県大槌町というところの図書館建設の検討委員をさせていただいたり、別の案件では、設計者の方々と図面を見て「ああじゃない、こうじゃない」とか議論しています。また一緒になって図書館づくりに入っていったりとか、いろんなことを、図書館というものに関わりながら自分のスキルを出させてもらっています。また、まちづくり、図書館とは別にまちづくりについても意見を言わせていただける機会もありました。

今は大阪や愛知県で自分達が命令せずに、人がどうやって動くのだろうかというのを半分研究もしながら仕掛けていく、演出していくというお仕事をさせていただいています。しかし、これはよく僕がやっているときにスタッフから、「演出という意味がよく分からない」というふうに言われました。じゃあ簡単に言おうと。「演出とは調査リサーチをして、企画して実行すること」だと。でもそこに一番重要なのは編集をするということです。

図書館の方々がほとんどなので分かると思うんですが、本棚に本を並べただけでは、それは演出ではない。そこからチョイスをして、何かこのＡという本とＢという本を結びつけて、そしてお客さまの手元に行くまでのプロセスを考えるのが編集なのですね。どうやったら取っていただけるかとか。

あとはお客さまが、どういうふうに入ってこられた時に心地よいかとか、空間を作る演出もあります。そのように編集と演出というのが、切っても切れない仲良しであるということを覚えていただきたい。それによってお客さまが何か好奇心を持ったものが、どんどんどんどん演出によって発想力が広がっていく。次へ次へと発展していくプロセスを皆さんが作っていくのだと思います。そこが演出の面白いところです。人が自ら動いてしまうということです。その時に小さく、人に見えないようにガッツポーズをしたりします。そのように演出というのは黒子なので、あまり人に目立たない・自分が目立ってしまうと自分が主人公になってしまいますから、たくさんの主人公を作っていくというのが仕事になるのかなと思います。

○理念は？　ミッションは？

図書館を少し考えてみます。ずっと図書館とは何だと、ずっといつも話をしています。「図書館って何なんだろう、図書館って何なんだろう」と何度も言う。その時にいま至っている答えがあります。「世界に通用する教養を身につけるところ」だろう。それは生涯学習とか言い方もあ

るかもしれませんが、それだけじゃなくて、僕は教養と言った方が良いのではないかなと思っています。何か物を見ても、映画を見ても、本を読んでも何かそこの背景にあるものを自分で嗅ぎ取ることができれば、厚みのある感動を呼びますよね。その教養を身につけていると「なんて楽しいんだろう」と思うはずなんです。もっと言えば、教養を身につけていると、人のことを尊敬できるのではないかなと思います。自分とは考え方が違っても、あなたはそういう考え、私はこういう考え、でもあなたとは喧嘩する必要はないということになる。平和という言葉になるかもしれませんけれども、僕は戦争をなくすには教養だと思っています。それには学校教育が必要ですし、そして図書館の協力が必要だと。

だから、図書館はお客様がどんどん教養を身につけていただくために努力をしなければいけない。その時に、図書館の方々も、企業の方々もですが、「理念は何でしょう」と。「あなたの勤めている場所の理念は何ですか」とよく聞きます。結構答えられない。そこで、その理念を使って、ミッションは何をするんだというのを確実に言えなきゃいけない。それも全員が言えなきゃいけない。少ないところはいいですけれども、もし 100 人、200 人いる企業だと、どうしようかなと思いますけれども、そこがブレると、もう全部ブレるんです。そこをやっぱり皆さん、今日はもう僕の話を聞かなくてもいいので、これだけは探しに帰っていただいてもいい位だと思います。掘り起こしてください。絶対にその建物を造る時、起業する時、絶対理念が決まっています。この理念は絶対ある筈です。ですから理念を探してください。そして職場の人達と共有してください。そしてミッションは何かというところまで行っていただけるとすごく嬉しいと思います。

僕達が図書館を作るときに、始めに決めたのは「理念」と「ミッション」二つなのです。理念は「交流と創造を楽しむ文化の拠点」を創ろうと。それは図書館なのか、交流センターなのか。何でもいいんだ。交流と創造、楽しむ文化に拠点を造るんだ。そういうことを考えましょうということから始まりました。そして四つの場というミッションをいただいたんですね。これは町民の皆さんと一緒に考えました。そしてそこから初めて館長を選び、設計者を選び、そして 50 人の町民の方々と２年間の会議をして、「まちとしょテラソ」というのを造っていきます。ですからこの理念とミッションがなくなってしまうと大変なことになる。

じゃあ理念があってミッションが分かった。そうすると「じゃあ、まちづくりをするのに演出として何をしようか」と言った時に、これは僕の考えですけれども三つのキーワードを押さえると結構きちっとできるのではないかと考えました。

それがこれから述べる三つですね。何かをするとき、図書館であってもプロジェクトであっても、「「広場」を造りましょう。広場という感覚でそこを語ってみませんか」というふうに考えております。

そしてそこでやることは「コミュニケーション」。黙っていても何もならない。情報交換をしたり、タイトルにありますように、交流をしたり、いろんなコミュニケーションの仕方があると思いますけど、どんどんコミュニケーションをする。そして必ず考えなきゃいけないことが「未来」を考えることだと思います。未来って自分の未来ではなくて、そのコミュニティの未来だったり、子ども達の未来だったり、下手すると地球の未来ということも考えてもいいのではないかなと思います。100 年とか 200 年という規模の先のことを少し頭の中に入れて考えてコミュニケーションをする。そうすると、逆に今やらないことが見えてくると僕は思います。遠いところなのだから、少し心をゆったりとして、でも今やらなきゃいけないことって何だろうというのが、確実に議論の中で出てきます。僕達は、「ゆっくりと早くね」とよく言うのですけどね。どっちでもいいのです。「早くゆっくりね」でもいいのですが。ゆっくりなんだけど、今やらなきゃいけないことを早くやりましょうと。

そういうふうに、何か今やらなきゃいけないことをしっかり見つめるためには、未来を考えた方が僕は良いの

ではないかと考えて、ずっと演出をやっております。だからそうしたマネジメントをしていくと、結構落し所があるのじゃないかなと思います。図書館の中でも、この図書館はどのような理念のもとで育っていくのだろうと考えた時に、じゃあ今やらなきゃいけないことと、やらなくていいことも出てくると思うんですね。これはこの図書館では必要ないのではないかとか。そういうことを考えられるのではないかなと思います。

○「おもてなし」と「コミュニティをデザイン」

著書の中に、浮き上がってくる 21 のキーワードを探したのです。この 21 個のキーワードから未来を語ったり、コミュニケーションをしたりということを考えています。ここに今言った「もてなす」とか「ないのにある」とかって入っていますけれども、僕の本をよく読んでいただいた方は「何番から私は響きました」という方がよくいらっしゃるのですね。入り口は最初からではない。私は３番からとか、４番からとか、そういうところからかなり響いてきましたというのを、それが僕はすごく面白いなと思っていて、いろんな角度のコミュニケーションの仕方があるのではないかなと。そして広場を造るやり方があると思っています。なので、自分が思いついたキーワードから、今の三つを少し考えていただけると何かそこには生まれてくるもの「ないのにある」が出てくるのではないかなと。今も言いました、この二つを特に大切にしています。

おもてなしをしながら、さっきの僕の名前の「花」という字もそうですが、簡単なおもてなしなのですが、「本当にそこに気付くだろうか」と言われたら「うーん」ということかもしれないです。しかし、その小さなものに気付いていただくということが、やっぱりもてなす最初のことかなと思います。

図書館サービスが今、本というものにこだわり過ぎている。僕は、本はすごく大事なものだと思います。一番大事なものですよね。スイッチを入れなくても自分が好きなページに飛べる。コンピューターと違って立ち上がるまで待つ必要がない。自分の意思で全部できる訳です。でもサービスする側が本という領域から出られなくて、ほかの情報と交流できていないのです。しかもタイトルにあるように、自分達が情報と交流できていない。本だけで情報交流しようとしている。違います。情報っていっぱいあるわけです。そういうものをきちんと自分が交流していくというのをやっていけば、そこは、僕は広場になるのだというふうに確信しているんです。

○図書館を壊す図書館を創造する

もう一つ。今度はサービス。僕は教えられたことばかりなのです。長野県図書館協会の方に教えられた言葉。「花井くんのところは桃太郎をちゃんと置いているかい」と言われました。「子ども達の目のつくところに桃太郎は置いているかい」と。この言葉がいつも僕は離れないのです。生まれた子ども達は、桃太郎だろうが、一寸法師だろうが、バムケロだろうが、何でも全部新刊なんだよと。桃太郎も新刊なんだと。そして、桃太郎は成人であらば内容を喋れる。そんな面白い新刊でないでしょうと言われて、だから必ず桃太郎やそういう古典というのを、まず目につくところに並べるべきじゃないかとおっしゃいました。なので、僕はよく図書館に行くと、桃太郎を探すのですね。

皆さんも桃太郎、知っている人はもうみんな、僕がこう話すと「そうだ、そうだ」とおっしゃるんですけれども、やっぱり表紙を出しているところは中々ないのですね。「桃太郎あるよ」と言われても。パネルシアターで一度桃太郎を真剣に聞いたことがあったんですけれども、すごくワクワクしました。本当に内容を知っていて、誰でも喋れるのに、次のネタが分かっているのに、何でこんなに入っていけるのだろう。これが生まれて本に初めて出会う子ども達だったら、どんなに素敵なお話なのだろうなと思います。サービスって、そのようなところから出てくるんじゃないかなと思うようになりました。要は、すべて僕が言っていることは、ファンを作りましょうということなのです。自分達がいる図書館のファンを

作りましょう。それは本のファンを作りましょうではなくて、その建物とか、場のファンを作りましょう。

そこに来ていただくことがまず大事なのだ。来ていただく。「またあそこに行きたい、あの人に会いたい」、そういうファンを作るということが、次のステップアップにつながっていくのじゃないかなと。先程も100年とか、そういう先までのファンを作りたい。そのようになっていけば、そこにある資料が輝いたり、これを手に取ってもらうために、「あの人が手に取るためにはどんなふうにしたらいいかな。」「あの人にファンになってもらうためにはどんなふうな演出をしたらいいのかな。」というのが、どこか芽生えてくるではないかと思います。その時によく言うのですけれども、図書館は本を借りるところ、受験勉強するところ、というのはよく言われますが、この二つが支配している図書館を一回ぶち壊しましょうと。多分僕らサイドにもそういうふうに思っているところがあったと思うのですね。それを一度、壊しませんかと。

そして図書館法に書かれている、創造性ゆたかな図書館をいま一度造りましょうと訴えています。そこから、これからの図書館が始まるのではないかなと思っています。先程も控え室で、大分マスコミにも図書館が取り扱われるようになった。この間、日経新聞にも特集がありましたし、いろんなところで、武雄市の例もありますが、テレビのゴールデンタイムに図書館が取り上げられると。内容は良し悪しとして、図書館という話題が今いろんな人の中に出てきている。今がチャンスだと僕は思うのですね。だからこういうタイトルの講演会もさせていただくというのもあるだろうし、今がチャンスで変わらなきゃいけないのは僕達だと思います。僕達が今もう一度、図書館法を豊かに解釈して、そして進んでいくという事に未来があるのかなというふうに思います。それには既成概念を取っ払わなきゃいけない。どんどん既成概念を取っ払いましょうと。取っ払う方法は一つある。妄想することです。妄想しなければいけない。どんなことでも、こんなことでもできるんじゃないかなと。これは無理かなと。大体こういうお話をしていると、「うーん、それはそうかもしれないけれども、うちでは無理だな」と言う方がよくいらっしゃるのですね。そうじゃなくて「うちだったら、どうやったらできるかな」に変わってほしい。それには妄想していただかないと困るのです。どんどん妄想する。

少し事例も踏まえながらですが、お客さんをもてなすのに、少し今までとはちょっと違うことをやってみようじゃないかと。まず図書館ではデザインに拘らないところが多いのです。小布施町も今の図書館になる前は、デザインに殆んど拘っていなかった。建物だけではなくて、チラシもそうですね。インフォメーション、デザイン、あとサイン計画においても、一つも統一感がないとか、封筒一つとっても、きちんと封筒のデザインコードというのを作っているかどうかというのは重要だと僕は思います。デザインが余りにもないので、一昨日あるところへ講演会に行ったときに、懇親会で一番話題に出たのがこのデザインだったのですね。どうしてみんなは、あんなにワードでチラシを作るのだろうかという話で盛り上がりました。どうしてちゃんとデザイナーを雇えないのだろうか。

それは予算がないからと言われちゃうのですけれども、そうじゃないと思うのです。予算がなくてワードで作って、何枚も刷って渡していて、だれに伝わっているのですかと僕はいつも聞くんです。それだったら、ちゃんと予算をつけて、伝わる道具を作って配布した方が僕はいいと思います。それはコストパフォーマンスとしたら絶対そうだと思うのです。いくら伝わらないものを使ってもしょうがない。あともう一つ、貼り紙なんかもそのとおりです。あと図書館は専門用語が多いですね。「オパック」、まず分からない。よく僕はまちづくりの講演会に行って、オパックが分かる人って手を挙げてもらうと数人です。皆さんオパック分からないです。あと「パスファインダー」、分からない。僕も分からなかったし。あと何で本棚のことを書架って言うんでしょうね。何で本棚って言えないのだろうといつも思っていました。

だから、書架に配架して、その前にあるのをオパック

に行ってとか、よく分からなくなっちゃいますけれども、分からなかったらパスファインダーでとか、もっと分からなくなっちゃうのですけど。こういうのは全部やめた方がいいと思います。あと「デイジー」も分かりませんよ。だって使っている人だけじゃなくて、そこでサポートしている人とか、これは世の中にこういうものがあるんだと分かってくれる人にも伝えなきゃいけない。なのにそれが、「デイジーって何だよ」みたいな、「昔そういうバンドいたな」みたいな、そんな感じになっちゃうのですよね。やっぱり僕も専門用語は止めた方が良いかなと思って、何で本棚って言えないのかなと思っています。

あと図書館は、貼り紙が多すぎますね。貼り紙が多いと図書館が汚れていくのです。大体残るのがセロテープの跡なのです。セロテープの跡が黄色くなって、もうそこにテープが貼れなくなっているところがありますよね。そうするとテープの跡がずっとズレていくのですよ。どんどん貼れなくなるから。汚いので結局最後はその壁を塗らなきゃだめでコストアップになっていくと。コストをきちんと守っていくためには、デザインをきちんとして守っていった方がいい。

「広場を造りましょう」と言うと、これは司書さんがいっぱいいる中では、なかなか反発も聞くのですけれども、司書さん達は、すごいスキルを持っている。図書館の中で、分類に重きを置いて並べるのは、倉庫にきれいに並べているのと一緒なんだと感じています。そこから次のステップアップへ移行するために、司書さん達はすごく勉強しているしスキルも持っている。そこから編集してほしいのですね。きれいに並べるのは良いことです。でも、そこをもう一つ、二つ越えて、何か手に取ってもらうとか、何かこの通りも、この通路を通ってほしいなとかいう呼び込みの方法とかを考えていける、そのような技術を司書さん達は持っていると僕は思います。

○司書だけで、もてなしができるのか

僕は司書のスキルを本当に信じていて、「もっともっとできるはず、もっともっとできるはず」といつも言うのです。でも司書というところからはみ出ない。実は司書なんだけれども、私はこんなスキルを持っていますとか、私はあれのオタクなのですとか、結構いる筈なのですね。そういうのも全部サービスに出して欲しいなと僕は言っていました。隠すなよと。全部出してよ。お客さまはいろんな人がいるのですよと。ただ単にストレートに来るわけではないのだ。あっちからも、こっちからもいろんな人が求めてくる時に、自分の持っているスキルをもっと出してくれると、もっとその空間・広場は楽しくなるのではないかなと。僕がやっていた時のスタッフの編成では司書の子は司書だけという子はいない。確実に何かのスキルを持っている。司書じゃない子は、司書じゃなくて自分のスキルを持っている。その何か持っているものを出していただきたいなというふうに思っています。

さっきからずっとほかの「情報、情報」と言っていますけれども、基本的にやっぱり本が、図書館にとって大事なものは本なのです。でも、図書館で大事だからといって、本だけにこだわっていると片手落ちになると思う。いろんなワークショップをやったり、読み聞かせもそうです。いろんなものをすべて本と繋がるような計画性を持っていくというのが大事なんじゃないかな。一番本当に素晴らしい道具なのですね、本というのは。でも、欲しい本が手に入らないからダメじゃなくて、その本と同じような情報ってある筈なのです。人だったり、モノだったり、その情報とくっつけていけるのが図書館という広場だと僕は気がします。なので、いつも頭の中はこういう状態で仕事をしたいなと。

まちとしょテラソでは、タイムシェアリングを呼びかけました。「新しい公共」という言葉がちょっと前からありますけど、僕は新しい公共って、今まで公共が使う人達とかいろんな人達のわがままを聞きすぎているのじゃないかなと思うんです。図書館はわがままを聞くところではない。いろんなものを、情報をシェアするところだと思っています。なので時間もシェアしてくださいというふうなお願いを始めて、大分皆さん協力的になってきています。最初の１年はいろんなことでお叱りを受けた

り「何だここは」とか言われましたけれども、今はもう「ああ、ここはテラソだからね」というふうになったのです。

図書館で、社会人席というのがあるのを知っていますか。社会人席がある図書館があったのですね。びっくりしました。僕。聞きました。「だれが座るのですか」って。そしたら「社会人の方です」と、当たり前の答えが返ってきて、そうかと思って、「学生は？」と言ったら、「学生は座れません」と。何でそんなことするのだろうと思ったら、「学生がぶわぁっと押し寄せてくるので、社会人の人が座れないんです」と。僕は、それは理由にならないのじゃないかな」と思いましたね。やっぱりシェアするとなると、集団机を作ってもいいと思うし、みんなで空間をもうちょっと使えるようにしたらどうなのだろうと。こちらから「ここはあなた達、ここはあなた達」という何か嫌な雰囲気を作っている。それと社会人席の多いこと、多いこと。すごいいっぱいあったのです、社会人席が。社会人がいなくなったらどうするのだ。じゃあ就職中の人はどうするのだと思いますよね。学生でもない、社会人でもない。どっちなんだよと。すごく昨日は憤りを感じていました。

小布施の偉人にこんな人がいます。髙井鴻山といいまして小布施町の、江戸時代の豪農豪商です。この人がいたお陰で、私達の町には、晩年の葛飾北斎が逗留することになりました。髙井鴻山は、北斎に絵を習いながら、妖怪の絵を描いたのですね。なので、ずっと妖怪というのは大切にされているのです。このようなことから図書館はずっと妖怪という本を買い続けています。でも僕が就任するまで、全部分類で分かれていました。そのためお客さまには、妖怪の本が何冊あるかも分からない。それで妖怪のコーナーを作ることにしました。僕達の町のすごいキラーコンテンツな訳です。

だから図書館に入っていくと、目の前がこの棚です。「何でここに妖怪？」という人が必ずいらっしゃいます。妖怪コーナーの前にずっと立っている人は、「私も妖怪好きなんですよ」と必ず言ってられます。この担当していた司書がいました。この司書はもう町では妖怪好きってみんなが知っているのです。だから図書館に、この司書に用事がある人は「きょう妖怪いる？」とかって来るのですよ。そしたら「奥の部屋にいます」とか言って。もうそれでコミュニケーションが取れてしまう。妖怪がいる図書館って素敵でしょ。そういうことをやっていると、みんなが妖怪と一緒に「いま生きている人も妖怪っぽいよね」ということになってしまいまして、「じゃあ妖怪探ししよう」と。スタッフと、デザイナーと、そしてカメラマンが妖怪の取材に出かけて行きました。

そしてある時「妖怪カード」というのを作ったのですね。僕も妖怪にされています。町長、町の社長さん、和尚さんとか、いま生きている人も妖怪っぽいと。これがすごい人気を得まして、このカードはすぐなくなっちゃいました。

こういうふうに図書館が持っているスキルと、町の人が面白がるものをミックスして、町へどんどん出て行く。これも面白いなと。別に図書館では必要ないと思って、こんなサービスもできるというふうに、町とのミックスです。また本とのミックスです。

〇100 年前を伝え、100 年後へのおもてなし

小布施デジタルアーカイブ

今日はデジタルアーカイブの話がこの後もたくさん出てくるので、僕達のことをあまり言ってもしょうがないかもしれないですが、デジタルアーカイブをやった時、こういう言葉を大事にしました。「未来への責任がある筈だ」と。さっきも言いました 100 年、200 年。やっぱり未来に対して、僕達は今どうやって生きているのかと、僕達より前の資料たくさん貰って、それは僕達が預かっているだけで、そしてまた未来へお渡ししなきゃいけない。お渡しする時に、自分達の歴史を含めて、未来へお渡ししなきゃいけない。そういうことを考えた時に、デジタルアーカイブというのは大切な図書館の事業であると思います。

小布施ちずぶらりというのを作りました。これは 18 世

紀の小布施町の地図なんですが、この中にピンを打ちまして、ピンを触ると、隣から今の小布施町の情報が出てくるという品物なのですね。アプリは無料でダウンロードできます。人物のアーカイブをしたりとか、講演会とか、セミナーとかたくさん図書館はやります。それを講師の先生にＯＫをいただいてＤＶＤにします。図書館がやるセミナーは来てくれた人が「わぁ楽しかった」で帰るお祭りではないんだと。全て資料なのだと思います。それをアーカイブして、また次へ来られなかった人にお見せするのが良いのではないかなということでこんなふうに作っています。

このように小布施町とか図書館がいろんな情報を持っているわけです。美術館もたくさん持っているし。ＭＬＡ連携を一つの核として、一つのデータベースを作って、その中で本もある、絵もある。さっき言ったいろんなものが出てくるデータベースを作って連想検索してみたら、町のことが多角的に見えてくるのではないかな。そしてそれを情報発信していけるような形を作れば、情報と交流ということのキーワードはまた浮かび上がってくるのではないかなと思っています。

〇まちじゅう図書館

こんなこともやりました。これはアナログですけれども、「一箱古本市」というのを毎年２回、春と秋に開催します。これをやり始めたきっかけは、「まちじゅう」を図書館にしようというきっかけがあります。それは設計者の方からのアイディアで、僕達がそれを形づけていったのです。小さな町の図書館で、本がいっぱいになるのはもう分かり切っている。だったら町中に本棚を置いて、町が全部図書館というふうにしてみてはどうだろうということから始まりました。その時にはっと思ったのは、酒屋さんは絶対お酒に関する本を読んでいるだろうと。パン屋さんは絶対パンとか紅茶とかコーヒーの本を読んでいるのではないか。そうすると専門書もあれば軽い雑誌もあるかもしれない。それを家の奥深くの本棚じゃなくて、玄関に置いてもらったら、人と会話ができるのではないかなと思ったのですね。それは図書館が目指す「交流と想像を楽しむ文化の拠点」という理念にすごく沿っているなと思って声がけをしました。でもいきなり「まちじゅう図書館をやりませんか」と言っても、中々それは厳しいだろうというところで、古本市をやろうと。テーマは、「本がある」ということなのです。本がある町をみんなで演出してみようと。そうするとどんなに楽しいかというのを知ってもらった挙げ句、「まちじゅう図書館」というのをみんなでプレゼンテーションしようじゃないかというところから始まりました。

町の通りに、蔵があるのです。小布施町には、本屋さんがないですから、東京から古本屋さん 10 軒位に来てもらって、２日間だけの本屋さんを出現させてもらいます。ここからがスタートなのですが、町に行けば、お兄さんがいきなり絵本を読みだすという人が歩いているのですね。子どもを見たらいきなり読み出す。「ゲリラ読み聞かせ」と僕らは言っていますけれども。こういう人がいて、急に読みだす。「うわぁ」と子ども達が寄ってくる訳です。それをしていくと、ガレージで本屋さんをやっていたりとか、いろんな人がいろんなところで絵本を売っていたりする。テントの下でも。プロもアマもやっている。神社にも本屋さんが出現する。こういうふうに本があるということは「すごく楽しいね」という、何かそうやって「散歩もできるね」ということをしてもらっていたところに、まちじゅう図書館ということを作り上げました。

〇ひろがるまちじゅう図書館

最初は 10 軒から始まったのですが、今は 17 軒ほど登録していただいて、スタンプラリーみたいなものをやるのですけれども、「パスポート」といわれるものを 200 円で買っていただいて「この中にスタンプを押していってください」ということなのです。町へ行くと、フラッグが並んでいます。そこは本棚がありますから、勝手に入って行って見てください。別にそこの品物を買わなくてもいいですよというルールになっています。たとえば、アップルパイのお店ですが、ハリーポッターとかちょっ

と怪しい本が並んでいます。子ども達が大好きなアップルパイ屋さんで、「よく寄って借りて帰る」とオーナーの方がおっしゃっていました。銀行では、「銀行地方論」とか、「マネーアドバイザー」といったタイトルの本がならんでいます。やっぱり銀行っぽいのが並ぶわけです。こういうふうに狙った通りの本が出てくる。これで面白いなと思ったのですね。それを目掛けて、やっぱりお客さまが来るわけです。結局、人と人が繋がるきっかけになっているのですよ。あそこはどうでしたよね、こうでしたよね。やっぱり素敵な本に会うとだれかに紹介したい。やっぱり人と人との交流が、本が繋いでくれている。こういう世界観って図書館は本当に持っていることなんじゃないかなというふうに僕は思っていて、それが大きな箱だからできるとかできない問題ではないと思うのです。どうやって繋ぐかを考えていくと、人が繋がっていくのではないかなと思います。

一般の人がオープンしてくれました。こんな明治まで大きな商売をやっていたので、これはもう間口が広いのですね。ストーブまで用意してくれて、こんな大きな本棚も用意してくれて本棚の下の段はルールがすごい。「ここの本は返すな」本を返しちゃいけないのです。もう読み続けているから返しちゃだめ。すごいです。９時から５時までフリーでオープンしていて、主がいなくてもこのフラッグが掛かっていたら、だれでも使ってください。ただ５時で一回閉めて、そのあと予約制にすればここでパーティもやっていいように、キッチンが付いていたり、お菓子も置いてあるし全部無料です。いま何が起こっているかというと、中学生達がここで勉強しています。すごいですよね。コミュニティの作り方って、こういうところにあるのだなと僕は思って、僕達はそこまで発想できなかったのです。やっぱりそこの場所が持っている、広場が持っているエネルギーが、僕らの言葉にすれば、「ないのにある」がどんどん湧いてきているのではないかなと思います。

そういうふうにやっていて僕は思っていたことが、これはもういつもお話する、僕達図書館が持っている情報をどんどんため込むだけじゃなくて、やっぱり公開しなきゃいけない。それを情報発信しなければいけないわけだから、いろんなケーブルテレビを使ったり、新聞・ラジオ・テレビ、そしてフェイスブックとかＳＮＳを使って、どんどん表現していこうと。小布施町のことを、図書館のことを、全てを表現していったら、いろんな人に届くはずです。でも届いただけじゃなくて、今度はその人達からのお返しの情報が来るはずなのです。その情報をいち早くキャッチするのが図書館ではないかなと。図書館は出すばかりじゃなくて、ちゃんと返ってくる情報をキャッチして、また自分達のコミュニティにお返ししていく。そういう場所であるのならば、図書館というのがハブという形になるのじゃないかなというふうに思うようになりました。

図書館はいつもいろんな外と中の真ん中にいて、それを繋いでいかなきゃいけないだろうと。ハブという機能を使っていけば、情報の交流を図書館がいち早くやっていけるだろうというふうに考えています。やってきた結果がこうなりました。旧図書館は、年間平均が約２万人の来館者でした。まちとしょテラソになって、去年、約14 万人の来館者になりました。入館者が７倍になりました。でも注目したいのが、この予約リクエストですね。本にこだわったサービスをお求めになっている方々の数は、旧図書館が 931、まちとしょテラソが 857、ほとんど変わっていない。本というものだけのパフォーマンスで来られている方の数字が変わっていないということです。でも入館者の差が７倍になっていることはどういうことか。

やっぱり今まで使わなかった方々が図書館の情報というものに気付いたと思っています。なので、ある程度サービスは成功しているのかなと思うし、このサービスを上げていかないと、コストパフォーマンスは絶対上がらないから、予算を減らされてしまう。やっぱりここは、マネジメントする人達は、ここを一生懸命訴えなきゃいけない。やっぱり、何倍になりました。今まで使っていない人も使っているので、もう少し予算をくださいとい

う、なかなかくれないですけれども、維持をするというところも含めて、みんなが良いパフォーマンスをするための図書館を造っていかないと、僕達のいる価値をすごく問われてしまう。ある行政とか行くと、「図書館いらないんじゃないか」という人達もいる訳ですよね。そうじゃないというふうに僕は訴えたい。

東北から始める「まちじゅう図書館」プロジェクトをやっています。これはこれから離島に行ったり、限界集落と言われている、図書館がないところにも、この手法で本をたくさん集めて、情報を集めれば図書館になるのではないか。そして日本がもっともっとボトムアップできるんじゃないかというふうに信じて僕は思っています。なので、余っている本や余っている現金を募集しております。よろしくお願いします。はい、時間になりましたので。フェイスブックとかメールとか、ホームページもありますので、ぜひ今度は僕と皆さんが交流できればなと思います。どうもありがとうございました。

＜事例発表①＞

「デジタル時代の図書館サービス」

秋田県立図書館情報サービス班 主査 嵯峨　進氏

本日は「デジタル時代の図書館サービス」と題しまして、昨年10月から運用を開始したデジタルアーカイブと電子書籍、この二つのサービスを中心とした秋田県立図書館のデジタルサービスの取り組みについてお話しさせていただきたいと思います。早速、秋田県立図書館の略歴について、簡単にお話しさせていただきたいと思います。

秋田県立図書館は、1899年11月に秋田県立秋田図書館として開館しております。年号でいうと、明治 32 年になります。時代がかなり飛びまして、1993年（平成5年）11月に、建物としては4代目になる現在の建物が開館しました。来月で20年になります。次に、1996年（平成8年）に、パソコン通信による蔵書検索を開始しました。パソコン通信というと時代を感じさせる言葉になってしまいましたが、最初はｗｅｂＯＰＡＣ（ウェブオーパック）でなくパソコン通信による蔵書検索を開始し、同時に図書館のホームページを立ち上げました。このころから徐々に所蔵の貴重資料のデジタル化に着手し、画像の公開を始めております。次が 2000 年（平成 12 年）にホームページ上で、県内にお住まいの語り部の方の昔話を録音したものを、音声配信サービスとして開始しております。併せて郷土雑誌、秋田県関係の雑誌のデジタル化した画像の公開もこの頃から行っております。また、同年の12月に、ｗｅｂＯＰＡＣのホームページ上での公開を開始しました。2004年（平成16年）からはメールマガジンの発行閲覧室内でのホットスポット、無線ＬＡＮのサービスを開始しました。翌2005年（平成17年）10月から、県内図書館の横断検索システムの運用を開始しました。また、秋田魁（さきがけ）新報という秋田県の地元の新聞社から許諾を得て、独自に記事の見出しを入力し、新聞記事索引データベースをホームページで公開しています。そして平成 24 年（2012 年）10月からデジタルアーカイブおよび電子書籍のサービスを開始しました。

続いて、秋田県立図書館の現状、課題を簡単にまとめてみました。平成24年、昨年度の入館者数、貸出冊数は、開館 330 日で入館者数が約 45 万人、貸出冊数が約42万冊でした。平成15年、約10年前と比較すると、人数・冊数とも増加しております。秋田県では、平成 23 年から平成 27 年の５カ年計画で、県民の読書活動を推進する目的として秋田県読書活動推進基本計画を策定しております。定めた基本計画に則り、現在多様な読書活動を行っているところです。秋田県立図書館としても、この基本計画に沿い、様々な活動を行っていると

ころです。その中の一つに、「打って出る司書事業」というのを昨年度から行っています。外部の方々から見た図書館司書のイメージは、日がな一日カウンターに座って動かないという印象を持たれがちだと思われますが、「打って出る司書」事業では、市町村図書館、学校図書館、あるいは公民館とか場所を問わず、読書活動に関連するイベントにどんどんと出で行って、それぞれの司書が持っているスキルを活かした活動を強力に推進しています。具体的な内容は、読み聞かせの講習、本の選書のアドバイス、本の修理・補修、閲覧室内の模様替えのアドバイス、図書館の掲示についてのアドバイス等です。

ここまでは、良いお話をしてきましたが課題もあります。多くの図書館と同様に、予算が削減の一途を辿っている状況で、特に資料費がどんどん減らされて、職員も減らされているような状況になっています。貸出冊数のところで、ここ 10 年では増えていると申し上げましたが、昨年単年度でいうと、微妙にですが減少に転じました。入館者数は昨年度も増えましたが、貸出冊数が減少したのは、やはり資料費の減少が大きいのではないかと考えています。

秋田県全体の問題としては、少子高齢化が日本一進行している県であり、人口自体も減っていますので、直接サービスについては、今まで以上の利用者の増加は中々難しい状況になってきていると考えております。そこで、広い秋田県で直接物理的に来館されるのが難しい方々も多いため、非来館型のサービスの充実という事を考えました。相互貸借サービスや郵送複写サービスは、どちらの図書館さんでも大抵やっていらっしゃると思いますが、当館では図書宅配サービスを平成 17 年から行っています。宅配業者と契約して、送料はご負担いただきますが、県内にお住まいの利用者の方に宅配便で貸出を行っています。本年度は資料の重さが 30 キロまで片道 315 円になっています。また、更に図書館利用を推進するために、従来にない非来館型のサービスとして昨年度から開始したのが、デジタルアーカイブシステムと電子書籍の二つのサービスです。

まず一つ目の秋田県のデジタルアーカイブシステムですが、県内の各館、図書館以外の類似する諸々の機関が所有するデジタル画像や、目録等の展示化された情報を一度に横断で検索することができるようなシステムです。図書館と比較して遅れがちな、地域の博物館、美術館等のデジタル情報のネットワーク化を支援し、連携して利用者に提供するＭＬＡ連携（Ｍ：ミュージアム、Ｌ：ライブラリー、Ａ：アーカイブス）も念頭に置いて立ち上げたシステムになっています。図書館は、大抵のホームページにＯＰＡＣが入っていて、ユーザーの方に蔵書検索を提供していますが、博物館・美術館のホームページには中々所蔵の目録の公開までは至ってないのが現状だと思われます。こういったところと一緒になって、利用者の利便性の向上に資するよう立ち上げたのが、このデジタルアーカイブシステムです。今年 10 月現在の参加館としては、秋田県立図書館と、あきた文学資料館、秋田近代美術館、県立博物館、公文書館と秋田県埋蔵文化財センターの６館となっています。現在は秋田県の機関による構成になっていますが、参加自体は門戸閉じている訳ではなく、市町村機関あるいは学校図書館等にも参加を呼び掛けているところです。

システムの中身は、システムのホスト役は県立図書館が行っていますが、図書館、公文書館等の館種を問わずに、各々が自らデータを登録・管理することによって、ネット上にアーカイブシステムを提供できるようになっています。このシステムのために新規データを入力するのではなく、各館既存のデータを活用できるように、システム側

にメタデータのマッピングによる共通化、要はシステム側に運用の柔軟性を持たせた形になっています。例えばエクセル等のソフトウェアを使って、館内用の目録を作っていることは多いと思われますが、それを中々利用者の利用に供するまでには至っていない。図書館のＯＰＡＣのように、ホームページで公開するところまでは至っていないというところが多いと思われますので、それを橋渡しできるようなシステムになっています。このシステムに登録できるデータは、目録データ、画像・動画データ、音声データとなっています。最初の方に当館の昔話、音声の配信のお話をしましたが、現在この昔話は、デジタルアーカイブ上でお聞きいただけるようになっています。

検索につきましては、単館単位および横断検索が可能なシステムになっています。システムのトップ画面は、検索ワードを入れて検索すると、デフォルトでは横断検索ができるようになっています。トップページに写真が６枚ありますが、これが先ほどご説明した参加館です。県立図書館、文学資料館、近代美術館、博物館、公文書館、埋蔵文化財センターの６カ所。それぞれクリックすると、単館での検索ができるようになっております。

下の方にピックアップとして、おすすめの資料を掲示できるようになっており、例えば、『解体新書』。上の方にサムネイル、縮小画面が出て、詳細情報などが表示されるようになっています。『解体新書』は５巻組になっていて、解剖図は５巻にまとめて載っています。その中で一番有名なのが多分、この扉絵と思われます。私は所蔵資料の掲載の担当をしておりまして、県内外の利用者から一番お問い合わせが多いのは、やはりこの扉絵です。なぜ解体新書が秋田県立図書館にあるかといいますと、挿絵を描かれた小田野直武という人が秋田出身だからです。５巻の一番後ろに、小田野直武さんのコメントが残っており、デジタルアーカイブでも見ることができます。

デジタルアーカイブの今後の課題は、コンテンツの充実というのが当然求められている事です。現在は６館だけですので、県立機関を問わず、登録機関を充実させていくというのも、当然挙げられるところです。また、ユーザーインターフェースの改良も必要で、先ほどの解体図等をご利用のお問い合わせ、大変多いですが、システム上から画像を二次利用しようとすると、現状は若干使いづらいシステムになっています。システム自体の使い勝手の向上というのは、今後ともやっていかなければならないところです。加えて、システムのホスト館として、館内で対応できる人材の育成を継続してやっていかなければならないと考えています。

続いて、２つ目の電子書籍についてお話をさせていただきます。先程もご覧いただいた貴重資料の画像は、昨年度のデジタルアーカイブ導入前からホームページ上では画像は公開されていましたが、公開から時間が経過したこともあり、利用が頭打ちになってきた面がありました。そこで、さらに利用を促進し活性化を図る目的で、電子書籍としても利用できるように再構成したという面が１つ。また、図書館、出版社、書店等の関連団体がそれぞれ受入可能な形で、利用者の方に提供できる電子書籍システムを構築できないかということを、関係する業者等を交えて協議して作り上げたのが、秋田県立図書館の電子書籍システムになっています。

運用の中身ですが、貸出冊数は一度に一人３点以内です。これは現実の図書の貸出冊数上限とは別のカウントになっており、貸出期間は 10 日間。返却は返却処理、返却の操作により返却されますが、返却処理しなくても 10 日が過ぎると自動的に返却されますので、延滞というのは発生しないようになっています。予約は、貸出中の本について

予約が可能。基本的に１タイトルにつき１ライセンスなので、一人の方が借りていると、貸出中になっているというような形になっています。

肝心の利用できる電子書籍の内容ですが、10 月現在は約 650 冊となっています。内訳は、『歴史読本』、『週刊ダイヤモンド』、『モーターファン』等の雑誌のバックナンバーや、大月書店から出ている子育て健康シリーズ等々。子育て中のお母さんというのは、中々図書館に行きづらいと考えまして、非来館型のサービス提供ができないかということで選定しました。また、今年度から小松左京の日本沈没の直筆原稿も公開しています。こちらは電子書籍のシステム会社と小松左京事務所とのコネクションがあって実現しました。全国に先駆けて、秋田県立図書館で公開する形になります。あとは先ほどお話しした、自館でデジタル化した資料が約 1350 冊。こちらはデジタルアーカイブと重複はしておりますが、両方合わせて約 2000 冊の資料で運用しています。

利用手順は、まずは秋田県立図書館の登録利用が必要です。利用者カードの番号がＩＤになり、パスワードは、初期パスワードをカウンターで発行し、それをご自分で利用する本パスワードに変更、その後閲覧用のアプリをダウンロードしていただくという流れになります。アプリは現状アンドロイド版とｉＰｈｏｎｅのｉＯＳ版の２種類のみご利用いただけるようになっており、今のところパソコンでは閲覧できません。

実際の貸出に至るまでの流れは以下のとおりです。閲覧用の図書のデータを含む電子書籍システム本体は、外部の電子書籍システム会社が管理しており、利用者はダウンロードしたアプリを使って、先に設定したＩＤとパスワードで電子書籍システムにログインします。その際、システム会社から図書館にＩＤとパスワードが合っているかどうか照会がきます。入力されたＩＤとパスワードが合っていることを確認後、ログインが承認されます。その後ログイン状態で貸出申請を行うと、図書データが配信されるという流れになっています。

実際の操作画面では４つのメニューがありまして、左から２番目の図書館の画面で借りる本を選びます。借りる本を選択し、カートに入れて、カートの中で貸出手続きを行います。一番下のマイ本棚（メニューの一番左側）、貸受けた本はこちらに溜まっていきます。ご覧の画面はサンプルなので、借り受けが 32 冊になっていますが、実際の運用では３冊までという形になっています。そしてこちらが閲覧の画面になっておりまして、拡大縮小は二本指で簡単にでき、ページはスライダーでパラパラめくるようにもなっています。

今後の課題としては、大部分が先ほどのデジタルアーカイブと共通しているのですが、利用可能な資料を充実させていくということが、今求められているところです。つい先日も利用者の方から、資料が少ないというご意見をいただきました。同時に資料の差別化というのも大事なのではないかなと思っています。ベストセラーばかりの資料となると、一時期言われましたように、金太郎飴のような蔵書になってしまう可能性があるわけで、それを防ぐためにどうやって特色を出していくかということが電子書籍においても大事ではないかと。可能であればどんどん自館で、地域資料のデジタル化を行っていけるというのが理想なのではないか、そのためには自館の技術力を上げていかなければならないと考えています。また、ユーザーインターフェースについては、システムが立ち上がったばかりでまだまだ洗練されていない部分があり、継続してバージョンアップしていかなければならないと考えています。

＜事例発表②＞

「北摂アーカイブスについて～地域の記憶を記録するということ～」

豊中市立岡町図書館　司書　西口　光夫氏

今日は「北摂アーカイブス」ということで、お話をさせていただきます。

まず豊中市について、皆さん土地勘も全くないと思いますので、どれ位の規模の都市かということを簡単に説明させていただきます。人口 39 万人の中核市になっています。小学校が 41 校、市立中学校 18 校です。市立図書館はなんと９館もあります。さらに動く図書館、あと２分室です。バス図書室といぶき図書室というところです。バス図書室は、排気ガスの規制で 10 年経って動かせなくなったバスを有効活用したいことから、図書館から離れた地域の小学校にドーンと置いて、週に１回開室して「どうぞ使ってください」というふうにやっています。蔵書数については、市立図書館で 100 万、学校図書館で約 70 万あります。大阪市の北側に位置し、高校野球・高校ラグビー・高校サッカーの発祥の地です。高校野球は甲子園に取られ、高校ラグビーは花園に取られ、高校サッカーは東京に行っちゃいました。さらに高校アメリカンの発祥の地でもありますが、そんなことを言っても、もう誰も知らないということになります。豊中市というのはこういう感じの市かなということをちょっとイメージしていただければなと思います。

皆さんの封筒の中に不思議な冊子が入っていると思います。「しょうないＲＥＫのキセキ」というものです。これは豊中市が、図書館として地域住民と協働していくことは図書館の重要な事業ですよということを、花井さんが理念という話でされていましたけれども、豊中市も協働を理念としております。この冊子は、その７年間の軌跡を報告書にまとめたものです。本当は 250 円ですけど、今日は豊中市からのプレゼントということでお持ち帰りいただければと思います。簡単に言うと、図書館で廃棄されるまだまだ使えるリサイクル本を販売して地域に還元し、それを原資に様々な事業をしようという試みです。平成 16 年度から始まっています。中を見ていただきますと、演芸会を開催したりですね、何か図書館とは結びつかない不思議なことをやっておりますので、面白い本だと思います。見ていただければ何かの事業のヒントになるかなと思います。と館長に宣伝してこいと言われたので、とりあえず宣伝はこれで終わりたいと思います。

それでは、今日の本題に入りたいと思います。「北摂アーカイブス」についてということで説明をさせていただきたいと思います。テーマは三つ、まず北摂アーカイブス設立の背景ということで、なぜこの事業をやり始めたかということをお話しさせていただきたいと思います。次に、活動５年目を迎えようとしていますが、現在の活動とその課題についてお話ししたいと思います。そして、地域の記憶を記録することということで、この４年間一緒に市民と携わって、私が感じたことをお話しして、まとめにしたいと思っています。それでは、北摂アーカイブス設立の背景をお話しさせていただきたいと思います。

このアーカイブスに携わる前ですけれども、貸出室、大人のサービスもしましたし、児童サービスを６年ほど担当もしました。その後、システム担当をやったり、参考室の担当をしたり、いろんなことを併任しながら今に至っています。そのような経験に「北摂アーカイブス」を考えた背景があります。これをまとめると資料にある４つになります。考えた背景は、子ども室を担当していた時、夏休みになると子ども達がやって来て「地域

の資料ない？地域のこと知りたい」「いつの？」「おじいちゃんおばあちゃんが小さかった頃」。皆さんも想像つくと思いますが無いですね。なかなか地域の資料というのが無くて、地域の資料を見せようとすると、例えば、何とか市史とか、何とか町史。そのような資料を見せても分からない。子どもが分かる資料としては「縄文時代の…」というイラストを多くした本が豊中市で発行されています。お渡しして地域の歴史を学んだことになりますが、子ども達に満足いくものになっていないという思いがずっと続いておりました。

また、勤めていた図書館のある地域に石碑がありました。ある日、石碑を調べるため子どもが来館しました。石碑には何か文字が書かれている、大事にされている様子だがよくわからない。やはり資料が無くて、不十分な回答で子どもを返しました。当時、子ども室と参考室、私は両方兼務していましたので、参考室に昼座っていますと、いつもおしゃべりに来る地域のおじいちゃんが来ました。座ったら約１時間、地域の話、おばあちゃんの話、孫の話、日本の政治の話、いろんなことを取りまとめて１時間ぐらいお話ししていただけます。「あっ、そうや」と思いまして、このおじいちゃんに「ちょっと、ちょっと」と。友達のように「ちょっと聞いてくれますか」と。「何丁目のあそこの石碑」という前に「ああ、あそこはやな」と、わぁっとそこから 30 分、その石碑にまつわるいろんな話をしていただけました。その時にＩＣレコーダーでもあったら良かったなとつくづく思います。結局その聞いたことを「レファレンスノート」にまとめて書きました。子どもがまた来てくれたら紹介できると考えていたのですが、子どもは来ず、記録として残りました。多分これは館内で共有されることも無く、うちの館は９館もありますので、この図書館のこのノートにだけ収められている。本当は地域にもっと還元しなきゃいけない。この情報を何とかしなきゃいけない。住民こそ本当に地域情報の担い手で、私達はお助けをしていかなきゃいけないなというのをつくづく感じたわけです。

住民の持つ地域情報を集めて発信していくにはどうしたらいいのか、どうすれば実現できるのかと頭の片隅で考えているとき、ウィキペディアという存在に大きなヒントがありました。これを活用すれば地域住民のために何かできる。しかし、いきなり事業化すると、どの自治体でもそうですが、「それの安全性は？」とか「それは本当に大丈夫なのか」とか管理職・上司はおっしゃいます。

2008 年度に、一回研究したらいいということになり、ラスデックといわれるところから 200 万円の補助を得ました。豊中市だけでやったらもったいないと思いまして、隣の吹田市・箕面市・池田市、あと東京に行きたいから三鷹市という組み合わせにして、「これで東京に行けるわ」みたいな形でやりました。私達司書だけで研究しても面白くないなということで、大学院の先生や市民団体の代表の方にも参加いただいて、一緒に研究を始めました。これも話をすると長くなるのですけれども、とりあえず共同研究でやっていくと注意すべきところはあるが ICT を活用すれば、地域情報に無限の可能性があるのではないかというのが漠然と分かった感じがしました。ただ「安全性も気をつけないといけないけどね」ということだけ釘は刺されたかなと思っています。

そして、2009 年度になり「研究を具体化していかなあかん。けど予算が無い」と言っていると、文科省が「図書館・博物館における地域の地の拠点事業」という募集がありました。しかも２次募集。「ラッキー、１次募集はどこも無し。２次募集、いけるかもしれへん。あと締め切り１週間。どうしようかな」と、すぐ文科省に電話をしました。「こんなこと思っているんですけれども大丈夫ですか

ね、今から出しても」と。文科省からは、「現時点では募集はゼロです」と答えがありました。そこから、もう一度目的や抑えるべきキーワードや書き方を電話で何度も指導いただき、なんとか 3 日程で文章を仕上げました。その後、管理職・上司の承認を得る必要がありましたので、その時間を確保しました。「全額補助か半額補助か、来年はどうなるのか」の質問に対して、「市費は一切使いません」などと答えて承認のハンコをいただきました。

事業を進めるに当たっては、市民との協働が豊中市の理念でありますし、また、実行委員会方式が文科省の条件でもありましたので、図書館のことを自分達だけで決めずに、研究会に参加した方々に箕面市の方や学識経験者にも参加していただき実行委員会を立ち上げました。

まず、利用規約が議論となりました。これを話すと大変なことになるので第４条だけを出します。「委員会は自らの裁量によって、利用者から投稿された画像等に関して、本サービスによって公開展示を行えないことができるものとし、利用者はこれに異議を唱えないものとする。なお、委員会は公開展示を行わないことに対して、何らの義務と責任を負うものではありません」何てワガママな委員会だというふうに皆さん思いませんか。このようなことを謳ったんですけど、当時、管理職・上司の方、実行委員会の委員から言われたのは、ＳＮＳ系や出会い系サイトを利用した殺人事件が起きたとかいろんなことがあって、自分達のサイトの責任の範囲を明確にしてくれということを言われました。それで、こういう条文を、これが法律的に根拠があるのかどうか、分からないんですけれども、私達はこういうことしかできませんということをはっきり訴えようと、このような条文を入れました。さらに議論を重ねて、2010 年３月、サイトが立ち上がることになりました。

次に、現在の活動と展開についてお話をさせていただきたいと思います。協力していただいている市民の方を私達はボランティアと言わず、「フォトエディター」というお名前を付けて、その名称で活動していただいています。ホームページの更新であったり、写真展の開催、あと収集されたコンテンツの整理であったり、意見交換をいま平日のお昼と土曜日に週２回、月に２～３回やっています。なぜ平日と土曜日かというと、「子どものいる方は土曜日は出にくいね」とか、「働いている方は土曜日がいいね」とか意見を調整するのも大変で、「もう二つやります。私が両方参加してあなた方を繋げさせていただきます」ということで、木曜日と土曜日という形で活動をさせていただいています。本当は ICT で全部やりたいんですけれども、ICT が苦手な方とかたくさんいらっしゃいますので、紙でコンテンツを整理したり、エクセルで整理したり、いろんなやり方でコンテンツの整理をしています。ただ、メールはお願いして、普段の連絡は電話とかファックスではなく、メーリングリストを使って、連絡・報告をさせていただいています。さらに撮影に行ったり、現地にインタビューに行きたいですが、なかなか相手先とこちらとの日が合わず、出来ていないかなというふうに感じています。

先程お話しました「フォトエディター」という言葉ですけれども、ホームページを立ち上げる時にこちらもかなりの議論をしました。この名前だけで３回ぐらい会議をやって白熱したと思います。最初、ボランティアという言葉を私達は使っていました。これはあくまでも自発性という意味でボランティアを使いましたが、委員会の委員から意見がだされました。「ボランティア？言い方が良くない」と。大阪の人間と思って聞いといてくださいね。「ボランティア？お前ら行政はすぐボランティア、ボランティアちゅう言葉使うやろ。市民を

無償で使える下請けやと思っているんちゃうか。ボランティアという言葉は納得できへんな。図書館の事業やからサポーターでええんちゃうか」と言われました。これで１回目の議論は終わりました。次の会ですね。サポーターという言葉がどうしても僕自身がしっくりこなかった。「別に地域の歴史は地域住民のものなので、主役はやっぱり地域住民じゃないの？サポーターと言ってしまうと応援だけをするという意味合いになってしまう。それは違うだろう。地域住民が主役である以上、地域住民が主役になる言葉にしなきゃいけない」と考えて、最初「エディター」と、どんどん資料を編集して発信するという意味で、エディターという言葉を付けていたんですけど、エディターという言葉、「耳慣れない言葉」と意見がありました。そこで「フォトは分かりますか」と。「フォトって写真やな」「そうそう、写真です」、「エディターとは情報を編集・発信する人という意味です。」と色々まとめて、「写真を使って自ら情報を編集・発信する人」ということで、造語ですが「フォトエディター」という名前に切り替えました。やっていることは本当にボランティアというか、皆さん自発的に来ていただいて、無償でやっていただいています。こちらの意思としては、主役はあくまでも地域住民だという意味を込め、「フォトエディター」という名前を付けさせていただいています。あと人材を募集したり、先程も言いましたように、活動日をちょっといろいろアレンジしながら今後また考えていきたいなと思っています。

コンテンツの収集についてですが、中々集まらないとか集めにくいというところが本当ですね。実際コンテンツを持っている方はネットを見ません。そういう人に理解を求め提供していただくためには、時間がかなりかかります。「事業説明、ネットとは何か」というところからやらなきゃいけませんので、そういうことを考えると、ミスマッチがあり、見たいと思っている人は本当にたくさんいるのに、中々集まってこないというのが現実かなと。実際、初めて写真収集のため、その家に行くと残っているのは家族写真だけですね。風景写真なんて、自分が写っていなければ捨てられます。その通りだと思います。あと、ちょっと難しい問題ですけれども、著作権問題。これは擬似著作権といわれている問題らしいですけれども。例えば、豊中には北大路魯山人の星岡茶寮。戦前の美食倶楽部ですね。市史に掲載されており、昭和10年代なので著作権は切れ、掲載も可能かと思うのですが、所有者の方が写真の利用について、しっかりとした方針をもっています。ネット上に出すなら説明や不正利用への対策も必要です。そのような場合、どのように折り合いをつけていくのか今悩んでいます。

お金の話を簡単にしたいと思います。講師謝礼金とかお金の問題とか、ボランティア保険料位は払いたいなとかいうふうに今は思っています。

まずどんどん地域から住民は情報を集めて、情報発信して、ホームページとか写真展をやることによって、いいサイクルを生み出していけたらいいなと。あとエディターさんのインセンティブですね。無償でやっていただいているので、その辺りどういうふうにインセンティブを維持するのか。図書館で実際あるのですが、ちょっとした花壇に住民の方々がお花を植えてくれたりとか、そういう時に、例えば「何々理事会より提供」とか「何々さまより提供」という札を打つだけでいいから、その人がやったよということを表したら、心の満足感からやっていただけるのではないかと。「私はこの活動をしている」ということを何か表せるものを考えていきたいなというふうにも思っています。

今年になっていろんな利用が出てきました。「カメラが撮影した大阪府の昭和」なんですが、豊中

市立岡町図書館が取材協力や資料のありそうな機関を紹介しました。また、コメントの校正もお手伝いをして、編集協力をさせていただきました。ほかにも新聞社から取材があり少しずつですが、このデジタルサイトの価値が出てきたように思います。

最後に、いつもこの４年間、一緒にやってきて僕の心にずっと捉えているのは、上の言葉ですけれども「歴史は教科書のようには発展しない」ということをずっと心の中にとめています。例えば、戦国時代の京都、南山城。ちょうど国立国会図書館関西館があるあたり。皆さん戦国時代の京都というと、チャンチャンバラバラやって、「みんなどこも合戦や」というようなイメージを持っていると思います。その南山城の町史ですね。古い古文書とかを見ていると、戦国時代、ここは最も安定した時期で争いが無い本当に穏やかな地域。隣に奈良があったからとか、興福寺の影響やとか、いろいろと事情があるけれども、教科書では日本全国が本当に戦国の世の中で荒れていたと。この山形でも今朝、山形城を見学して、そちらの方で最上氏と上杉の重臣の直江兼続が、戦ったと書かれていて「おお、すごい」と思って見ていました。全国どこでも合戦があったかのようにイメージをしてしまいますが地域の歴史、やっぱりじっくり見ていくと、そういう自分のところにしかないものも出てくると思います。

さらに東京オリンピック、万国博覧会についてですが、東京オリンピックというと、皆さんは39年東京オリンピックで日本中盛り上がったという感じがあります。確かにそうです。ある時、当時の大阪の写真をちょっと１枚２枚ほど見たことがあるんですけれども、阪神百貨店の写真があったんですね。実は、我が愛する阪神タイガース、昭和39年に優勝しております。御堂筋シリーズといわれ、南海と争っております。10月10日以降、日本シリーズが行われました。みんな東京オリンピックのイメージがあって、全然印象がないと考えてしまいがちです。実際、阪神百貨店の写真を見ると、東京オリンピックの旗よりも「南海阪神日本シリーズ開催中」という方が大きいんです。阪神百貨店であることを差し引いても。「大阪の人にとっては阪神タイガース。昭和39年は」と。こういうふうに思ったりするわけです。だから後で植えつけられているイメージ、一様になっているイメージをこういうところで実は垣間見ることができると思います。

その中で私がデジタル化していくというのは、紙の写真だとその場でしか楽しめませんがデジタル化し広めることによって、地域の歴史として写真が宝になる瞬間かなというふうに思っています。

今からちょっと宝を紹介しようと思っています。私の勤める阪急宝塚線、岡町図書館のそばの駅の歴史です。昭和10年に撮られた写真です。奥にある建物が岡町駅といわれる駅です。今年この写真が手に入ったので、同じアングルで撮影したいと思いました。今は銀行さんになっています。銀行さんにお邪魔して、「お客さま相談室」に入らせていただきまして、じゃんじゃん電話がかかってくるところで「失礼いたします」ということで撮影しました。ほぼ同じ場所から撮りましたが、駅は高架されて、部分的にちょっと何となく面影が残っています。じゃあこの間はどうか。同じ場所ではないですが、昭和56年頃の写真。ちょうど駅が写っています。間をつなぐ写真になります。

こういうのを並べて展示したりとか、インターネット上に出すと大体次の日、これが好きな学校の先生とかファンが何人か、固定ファンが図書館にいらっしゃいまして、「おもろいな」という話で、また20～30分、階段でお話をするというのが日々で、公開直後は逃げるようにしています。また、役所のロビーを借りたりして写真展も行っており

ます。大きい写真、小さい写真、古い写真、新しい写真、撮影場所の地点ですね。これにフォトエディターさんが当時と比較する文章を書いていただいたりしています。

万国博、昭和 45 年ですね。開幕前の万博の様子です。阪急バスさんから提供いただいたんですけれども、これも阪急バスに依頼しまして「何か面白い写真ないですか」みたいな形で文書を書いてお願いしたらこんな写真が出てきました。万博も私達北摂地域のキラーコンテンツですので、充実させたいところです。

ある日、蛍池幼稚園というところに別テーマの写真預かるときに、昭和 45 年というアルバムがあって、めくっていると出てきたんですね。「何ですか、これ。園長」「いやぁ、俺も知らん」「45 年は万博ちゃいますか？」「そうやな、こんなことは万博ぐらいだろう」とその場は終わったんですね。次の日、たまたま活動日があったんですけれども、フォトエディターの方に、「こんな写真が出てきましたけれども知ってますか？」と尋ねると、「俺も撮ってるよ。」「えっ、撮っているんですか」すぐ持ってきてくれはりました。「カメラを持っている奴がいっぱいおったから一回募集したら？」ということで広報を通じて募集しますと送られてきます、どんどん、見たことないものが。「何？あの子象は」「ここに子象がおるの？」と。これを新聞等で調べると、今度は軽自動車のダイハツ工業さんから「当時の社内報が出てきたよ」ということで「自分の工場の前を通ったよ」「これヒロバちゃんと書いているな」とか、どんどんどんどん話が繋がっていくことをいま楽しんでいます。まさに地域の、このままダイハツ工業に埋もれていたら何もないですけれども、こういう形でどんどん地域の資産になっていければいいかなと思っています。豊中駅こちらは、どのようにして高架化していったか、当時の市民がどういうふうに議論をしていったかというのを書かれた重要なパンフレットで、今後またまちづくり等に役立てていけるはずです。こういうものもどんどんデジタル化していきたいと思っています。

最後まとめです。とりあえず地域の歴史というのは、ただただあるのではなくて、一緒にやっていくことによって地域の資産になっていくと感じています。記憶を伝える市民の力というのは増大です。先ほどのフォトエディターの方に聞くと、自分の知っている話題になったら顔が赤めいてきて、化学反応を起こしているのが分かります。自分の中でわぁっと記憶が蘇って、それを話しながら、それに私がこういうのを追跡調査すると、さらに化学反応を起こしてより知識が出てくる。図書館というのは、学びつつ教え合い、教えつつ学び合う場であることを日々体験しています。「Teach for learn　Learn for teach」お互いに刺激しあってアーカイブの活動を進めていこうと思います。ご静聴ありがとうございました。

＜事例発表③＞

「読書シティ宣言のまち、村山市　～交流と学習の拠点として、独自のイベントや仕組みを考案して～」

村山市商工文化観光課　課長補佐　奥山　典子氏

村山市商工文化観光課の奥山典子と申します。「何で商工文化観光課が発表するんだろう」と思われた方もいらっしゃるんじゃないかと思いますが、この３月まで１０年間、新図書館の構想から始まりまして、旧図書館の解体、新図書館への移転・引っ越し、また新図書館、甑葉プラザのオープンまでと通して関わらせていただきましたので、それまでの経緯、読書シティ村山というものが、どうやって形づくられてきたのかという話をさせ

ていただきたいと思います。

はじめに、村山市は山形県のほぼ中央に位置します。人口は２万６５０６人の市です。当初予算で財政規模１１７億円。この中で図書館費単費として４４００万円。図書購入費が１２００万円という、大変たくさんの予算を配当していただいております。

この甑葉プラザですが、平成２２年５月２９日にオープンしました。村山市総合文化複合施設というのが正式な名称です。この施設のコンセプトは「交流と学習によるにぎわいの創造」。もちろんこれだけのものを作るには補助金がなければ、我々のような小さな市では財源確保できません。そのため、国土交通省のまちづくり交付金事業を活用させていただきました。国交省の補助金ということで、図書館スペースは占有率として３割ぐらいです。構想段階では、もう少し広いスペースと考えていたのですが、精査して現状に落ち着いたところです。図書館はご覧いただいたでしょうか。この甑葉プラザの中の一番いいところ、１階部分が図書館という配置になっています。また、多目的に活用できるよう、１階にホール、２階に子育て支援施設と学童保育があります。また、おしゃれな本格フレンチを食べさせるカフェレストランが同居しています。

この総合文化複合施設整備の流れには、旧図書館の老朽化があります。旧図書館ですが、村山市の素封家が私立の図書館として私財をつぎ込んで大正９年１０月１０日にオープンした図書館。「私立喜早図書館」と言いますが、この図書館が原点になっております。当時「郷土に資するあらむ」という崇高な意思のもとに、昭和２６年まで旧楯岡町の文化を支えて参りました。周囲は病院とお寺という絶好の大変静かな環境の中にあったんですが、時代の流れで、駐車場も少ない、車のすれ違いもできないような狭い道路沿いにあったため、これは「新しい図書館が必要だ」という声があがったのが平成６年です。図書館を愛する「利用者の会」というのがあって、その人達が議会に要望書を提出しました。それからしばらく経って平成１４年に、新図書館構想検討委員会が設置されます。ここで検討３年。この当時、新図書館構想発足の時代に私は異動して来ました。その後図書館を核とした複合施設を造ろうということで検討４年の複合施設プロジェクトチームが組まれ、複合施設の準備室 1 年を経て、構想から実現まで８年間の歳月をかけております。

その間には、実にいろいろありました。「交流と学習による賑わいの創造」というのが、この甑葉プラザのコンセプトなんですが、その中で一番話題にされたのが「図書館で賑わいを作れるのか」ということでした。我々は「いや、絶対図書館に人が来て賑わいます」という話を何度もしました。図書館の利用者というのはエンドレスのリピーター、借りたら返す、返したらまた借りると、どんどん輪が広がっていく、絶対に賑わいはできますよという話をしていました。しかし、なかなか内外的な理解を得ることが大変でした。何しろ当時のアクセスの悪く狭い図書館の利用者が、１日に７０～８０人。年間で２７，０００人くらいでしたから、「そんなことで賑わいができるのか？来たって２、３倍ぐらいだろう」と言われていました。そんな中、まちづくり交付金事業には目標数値が必要で、入館者の目標数値をたてなければならない。では、どれぐらいの入館目標にするか、関係者と話し合いを重ねました。私達は「１日５００人の入館者は来ます」ということを言っていたのですが、「最初からそんなに大きく頑張るな」ということを周りの人に言われました。数値目標は達成できそうな努力目標にということもあり、指導に従い従来の３倍の６万人を目標にしました。ところが蓋を開けてみると、図書館単体だけで１年

目の実績が、６万人どころか１４万６９０６人。甑葉プラザ全体の目標入館者数が１３万５０００人だったんですが、もうその数字も越して１４万６９０６人。プラザ入館者実績の６２％、入館者の６割は図書館に来る人でした。

どうしてそんなにいっぱい人が来てくれるような施設になったか。新しい所に人が来るというのは通説ではありますが、かなり早い時期から、私達は図書館に関心を持つ人を増やそうと、ボランティア活動の意思のある人々や、自分のためのスキルアップを目指している方々を、図書館サポーターとして募集しておりました。いろんな人を誘って巻き込んで、読書活動を担う人として図書館を楽しんでいただきたいということがあったので、早くから盛んに関わっていただきました。絵本の読み聞かせは勿論ですが、講座を開いて製本や修理を覚えてもらったり、自分の本も大切にしながらのサポーター活動をしてもらいました。このサポーター制度は、活動内容を強制しないで、「できる時にできる人ができることを」やっていただくという主旨で、１０代から７０代まで実にいろんな方にサポートをいただいています。それに加えてこの甑葉プラザ自体にも市民委員会といって、協働体制を築きサポートする市民の力がありました。そのようなことで念願の図書館ができるぞという雰囲気があり、市民の方々に協力してもらうということを早くからやっていましたので、この甑葉プラザも、図書館自体も、我々が思っていた以上の人が入ってくださったのかなと感じています。

市民の力といえば、建物の引き渡しが済み、引っ越してきた時に、ごく短期間で配架をしていかなきゃいけなかったんですね。で、サポーターや市民委員会の方々に「開く前の図書館を、特別に見に来ませんか？図書館の中、広くてすごいんですよ」という話をして来ていただき、大変な作業に協力をしていただきました。皆さん本当に好意的に協力して下さったおかげで開館に間に合い、助かったことを記憶しております。

この新図書館が開かれた年は平成２２年で、国民読書年でした。当時のトップが「せっかく国民読書年に開く図書館なんだから、何か記念になることをやろうじゃないか」と非常に理解がありました。それで、記念になるようなものをおあげしようじゃないかと。最初に私達が考えたのは、ブックスタートだったのですが、自分で読めるようになった子ども達に絵本をあげようじゃないかと、小学生に入学記念の「はじめの１冊」として絵本をプレゼントすることにしました。オリジナルの絵本袋も付けて、小学１年生に、希望する本を１冊ずつプレゼントする。学校に出向いて、教育長が小学生一人一人に手渡しをするんです。そうしますと、ものすごい笑顔で「一生大切にします」とか、「宝物にします」とか自然な言葉が出てくるんです。そういうのを聞くと、「ああ、やっぱり本ってすごいな。絵本の力ってすごいな」ということを実感しました。もう一つ何かやろうと言うことで、ブックスタートになるその前、お腹に赤ちゃんができたお母さんを取り込もうと、「まだ見ぬあなたへ贈る、プレママ絵本作り教室」を考えました。母子手帳交付の機会に、市の保健課に協力していただいて「お腹のお子さんに絵本を作ってあげませんか。世界に１冊の手づくり絵本をプレゼントしましょう」と広報しました。絵本づくりキット、材料、ペンの類から講習会まで全部無料で出来ますから、記念になる１冊を作りましょうと、保健課の窓口で声かけをしてもらいました。残念なことに、参加実数はあまり多くないです。今は作るより、出来てるものを貰う方がありがたいという感覚があるようです。でも、参加者は多くなくても、とにかくお腹の子に作ってあげるという、その作るというものを大事にしてもらいたいなと

思い、ここはちょっと譲れない部分で手づくりにこだわって開催しています。講座の時間も最初は決めていたんですけれども、プレママさんが来やすい時間帯や、都合のいい開館している時間に来てもらえればいいです、いつでも大丈夫ですよ」と、門戸を広げましたら、赤ちゃんにパパとママで揃って手づくりする方も見受けられるようになりました。最初は、お母さんだけの参加だったんですけれども、「育メン」という言葉が流行ってきたら、お父さんが一緒に付いてきてくれるようになりました。その中には、見た目で判断出来ないなとつくづく思わせるご夫婦がいて、顔中ピアスをした１８歳と２０歳位の、すごくお若いご夫婦。こんなに熱心にと感動するほど、２人で一生懸命作ってくださいました。この事業は、作り終わるとご本人がお持ち帰りになるので、図書館にその作品が残らないのがちょっと残念なんですが、製作過程や完成写真を撮って記念にしています。

読書シティ宣言の話です。先ほども申しましたように、国民読書年に図書館がオープンすることで、「村山は読書をまちづくりに生かして行こうじゃないか。」ということになりました。本日の開会のあいさつの中で、「何もない村山市」との言葉がありましたが、実はいろんなものがあるんです。その、いろいろある中で何が一番大事か。まちづくりの基本は「人づくり」であるという意識の中で、村山は読書のまちとして人づくりを行って、まちの発展につなげていこう、読書シティ宣言をしましょうということになりました。

この年の市政方針にも、今年は読書シティ宣言しますよと書かれています。宣言自体は、村山市の第４次総合計画の中に盛り込まれていました。この総合計画も、市民との協働による策定でした。村山市は市民との協働やプロジェクトが多く、みんなで作り上げていこうとする姿勢があるんです。その読書シティ宣言も協働で計画を立てました。４月には読書シティ宣言に向けてプロジェクトチームを結成しました。村山市役所全体で関わってもらうため、総務課、企画調整課、学校教育課、生涯学習課、甑葉プラザ、それから図書館と、７名の選抜メンバーで検討し、９月の議会に上程。市議会の全会一致で「読書シティむらやま宣言」が採択になりました。１０月１日には図書館内で、宣言セレモニーを実施しています。

そのＰＴで、読書のまちを全国に発信していくのだから何か目玉になる事業をしましょうという話になり、いろいろ考えた結果「全国読書川柳コンクール」を創設しました。俳句や短歌と違って、川柳は気軽に参加できますからね。９月末に採択、その後募集と、広報する期間も短かったので「１０００点くらい来ればいいかな」なんて思っていたら、募集の１ヶ月間で、２０００点以上の作品が集まりました。これが年々増加の一途を辿り広がっております。読書川柳とは、誰もが気軽に読書や図書館に対する思いを川柳にするという主旨で、継続して実施されています。４年目の今年は賞品を２倍にしたことから、また応募数が増えてくれるんじゃないかなと思っております。全国各地、津々浦々に関心が広がり読書川柳が寄せられて来ます。

読書シティむらやま宣言の本文は、「本を読むことは、感性を豊かにし…」と、まず謳っておりますが、未来へ向けて、読書の素晴らしさを「次世代に伝えていきます」と続く、ここがミソなのですが、未来へ向けてずっと活動していく。心豊かな人づくりをすることが、みんなが幸せを感じることのできるまちづくりになるとの願いを込めての宣言文でした。

この宣言を記念して、あんなに小学生が喜んでいるんだからと、中学生にも入学の記念に本を１冊プレゼントすることにしました。中学生ですから、大人への入り口と捉え「飛躍の１冊」と名前

をつけました。どうやら中学生に本をプレゼントするというのは、全国的にも初めての事業らしいです。そこでメモリアルになるように、オリジナルのブックケースを箱屋さんと開発しました。実はこの箱、ちょっと分かりにくいかもしれないですが、飾っておける本立てになるんです。学校にこれをみんなで置いて、お勧め本の展示とかにも役立ててもらえるかな？なんて思って、こんなものを作ってしまう読書シティ村山の図書館です。

さて建物を作りました、読書シティ宣言しました。次は中身の充実です。花井さんのお話にもありましたが、「あるけど、ない」ではなく「あるし、あるよ」という状態を作っていくため、ユニークで他所ではやっていないようなことをやってみようじゃないかと、開館当初からアイデアをこらした事業を実施しております。建物自体を生かした企画として、ここの図書館、あとでご覧になっていただくと分かるんですが、非常に天井が高いんです。照度の関係で書架照明が付けられています。この書架照明と高い天井を活用して、ちょっとビターで大人の雰囲気の「夜の図書館」をやっています。館内は普段、ペットボトル以外は飲み物・食べ物禁止なんですが、季節に一度の夜の図書館では、煎れたてのコーヒーや紅茶などを提供し、ゆったりと味わいながら読書を楽しんでいただきます。しかも土曜日の夜１０時まで開館延長して、館内の高い壁を利用して上映権のある世界遺産の無音上映したりと、普段は来たくても来れない人に楽しんでもらえるイベントを実施しております。これは好評で毎月や、毎週やってくださいと希望が寄せられるのですが、やはりイベント性を高めるためにも季節に１回にしています。

また、親子を対象にした「絵本のようなお菓子を作ろう」というのもあります。おいしいお菓子が出てくる絵本たくさんありますね。お腹も心もゆったり甘い雰囲気になって、お菓子を焼いている間に、子ども達が隣の部屋で絵本の読み聞かせを味わうというものです。お菓子で釣っているんじゃないのとも言われるんですが、釣って何が悪い、来てもらって、本を好きになってもらったもん勝ちだろうみたいな感じで(笑)やってます。年に２度ほど実施していますが、とても人気で、募集するとあっという間に定員がマックスになってしまう人気イベントです。

また、「貸し切り図書館」もやっております。近くの小学校から、夜の図書館のことを聞いたけど、親子で一生懸命読書させたいから、うちの学校にだけ夜に開いてもらえないかと聞かれたんです。例えば１～２年、３～４年、５～６年という形で出来ませんかと。それで、そんな希望があるならやってみましょうと。我々リクエストは断らないんです。いいことはとにかくやってみようというスタンスでやりました。この時は照明をつけて、７時から９時までの２時間貸切です。一つの小学校の１～２年の親子だけで、図書館全部貸し切る訳です。まだその日は多少喋ろうと、多少スキップしてもある程度大丈夫にしましたら大変好評で「次はいつだ？」と。学校以外のところでお友達に会えるのがすごく楽しいようで、２学年ずつ３回を春と秋に実施しています。

また、庄内に「加茂水族館」というクラゲ日本一になった、ギネスにも載っている水族館があるんですが、ひょんなことから、そこのクラゲを借りてきまして、このホールでクラゲの一大イベントをしました。いろんな方に「何で図書館でクラゲなの？」と聞かれたんですが、科学に興味持ってほしかったし、図書館って何でもうまくしっくりいくんですよね。健康や食のイベントなんかもうまくいくし、何と結びついても自然にうまく行っちゃうのが図書館じゃないかなと思います。

次に他の学術機関との連携についてです。この辺は農村ですから、１０月は稲刈りなどで忙しく

非常に読書量が落ちます。読書の秋というよりは、やっぱり農作業の秋。そんなこともあり、あえて１０月はむらやま読書月間にしました。何か行事をやっていたら、関心持つ人は来てくれるだろうと、毎週毎週いろいろなイベントをやっていました。そしたら、なんと千葉にある放送大学附属図書館から、村山は読書シティ宣言したそうですけれども、うちにあるコレクションをそこで公開してみませんかと、向こう様からお話をいただきました。喜んで承諾し、村山市にゆかりあるシーボルトの日本初版など、貴重な資料を公開させていただく機会を得ました。

次に図書館カードを活用した商店との連携です。我々は「絶対図書館で賑わいができます」とある程度の自信を持ってはいたんですが、内心「登録者、どれだけ増えるかな」と一抹の不安が実はありました。じゃあ、この図書館のカードに何かステイタス性を持たせればいいんじゃないか。「このカード持っているとお得だよ。村山市民もほかの市町村の皆さんもお得だよ」と、妙案を探していたところ、目をつけたのが甑葉プラザ近くにある商店街です。今はどこもですが、商店街に人が来ないと大変苦労されているわけです。そこで商店街の人達とタイアップをして、このカードを見せればサービスが受けられる。例えば５％引きになる、おまけがつく。文房具やお花、雑貨など大人も子どももみんな対象で、平等にサービスが受けられる仕組みを作りました。図書館利用者をタダで返さず、商店のある街なかへ引っ張り出そうとしたのです。さらには市内全域の商店と結ぶことができれば、この図書館が入っている、甑葉プラザという「点」から商店街という「線」になって、市内全体の「面」になって賑わいが広がっていくのではと考えました。この図書館のカードを持っていると何かいいことがあるし、楽しいおまけつくし凄くいいよ、とカードの事前登録募集と同時に宣伝しました。勿論アイデアの発端は、図書館のカードを作ってもらい、来て本を読んでもらうことがメインなんですけれども、それをまちづくりの中にも生かす仕組みを作りたいと思いました。ただこのような仕組みを作れたのは、ここが図書館単体ではなく、この複合施設の中にまちづくり推進室というのがあって、私達図書館正職員２名もその併任辞令を受けておりまして、準備室や市民委員会発足の段階からずっと協働歩調でやってきたことでスムーズな展開に話が進みました。この甑葉プラザ応援団と言う仕組みは、応援団の加盟店は、まちづくり推進室が募集する。カードの発行と、商店でこんなサービスを受けられますよという宣伝説明は、図書館が担う。このような分担作業で、複合施設であることを最大に活かした相乗効果が生み出されています。

図書館の資料自体も、平成２４年度から質的向上を目指して特定テーマに沿った蔵書の拡大をしているところです。「ここ村山市には、蕎麦が有名です」と開会行事の挨拶の中であったんですが、最大の観光施設として、たくさんの種類があるバラ公園があります。そこで、「あなたのそばにバラの花」ということで、「バラと蕎麦」という、植物と食物にこだわった図書館づくりで所蔵数を拡大しています。先程「妖怪」って花井さんのところの話がありましたけれども、「バラ」とか「蕎麦」とかが出てくる本の場合には、それこそジャケ買いじゃないですけれども、全部買う勢いで集めています。その関連で２００万円図書購入費が増加しますと、利用も見事に多くなる。購入費が少なくなると利用も少なくなるのかという不安はありますが、ここまで作り上げた資料内容ですから、利用者に対してレベルを落とさずに保ってほしいと思います。

そのような３年間の活動の評価として、平成２４年１１月、総務省の「市町村の活性化施策７７

事例」に選んでいただきました。余談になりますが村山市は、「子ども救命士プロジェクト」「ガールズ農場」などいろんな面白い活動をしていおりまして、５年間連続で総務省の「市町村の活性化施策の事例」に選んでいただいております。詳しいことは、総務省のホームページをご覧いただければと思います。また、今年の春、平成２５年４月には、文部科学大臣表彰の優秀実践図書館として選んでいただきました。

私ごとですが、今年初めて図書館の外に出ました。入庁以来３５年間、教育委員会から出たことがなかったんです。ずっと図書館や学校図書館など教育関連で勤務していたんですが、このたび市役所勤務になり、図書館がどういう場所か外から考える機会を得ました。この会場では、図書館は人生で必要不可欠な施設と考えている人ばかりですが、役所の中にいると、必ずしもはそうではない感覚です。図書館行政というのは勿論ごく一部分なわけで、図書館で過ごしていると、甑葉プラザは賑わって、「すごい賑わいだ」なんて勘違いをしていた部分もあったんですが、市全体的な中でいくと本当にまだまだ一握りなんだなと感じています。外に向かって情報を発信していくということももっと必要ですし、特色というか何かあそこに行くと面白いぞ、行かなきゃ！というものを創り出さなければならない。

あとは人の問題ですよね。図書館でとても専門的で気持ちのいいサービスを受けてきましたよということがあると、また行ってみたいなと思う。もう私が申し上げるまでもないことですが、職員の資質、専門性とサービスの向上を繰り返していく必要があります。

また、図書館においでになるお客さまの、読書環境を守ることが大事です。村山市立図書館には、部屋ごとのコンセプトがあって、「おはなしのへや」という、子ども達が多少騒いでもいい部屋があります。まったく反対の方角には、静読室という、大人が静かに本を読むスペースを設けました。二つ、全く相反する部屋を、設計の段階から一貫してお願いして、造っていただきました。静かに読書したい人の静けさを守ってあげるのも図書館だし、子ども達の元気な声を守ってあげるのも図書館ということです。その辺りの賑わいとうるさいというのが、ときどき混同されるんですけれども、普通の図書館サービスとはどういうことなのか、日々考えていただきたいなという部分はありますね。

さて最後に、外部から図書館を見て、本を読まない知識を広げようとしないことは、人生においてかなりの損をすると感じます。図書館は必要な施設です。昔、アレキサンドリアの図書館の入り口に、「魂の薬」という看板があったそうです。図書館というのは魂の薬を与えてくれるところなんだということを感じながら、これからも図書館活動を続けていただきたい。私もいつか再び図書館に関わることがあれば、その時は外から見た経験を、十分生かしたいと思います。今回は、このような機会をいただきありがとうございました。

＜事例発表④＞

「まち･人･オガール～新しい図書館の役割～」

岩手県紫波町図書館 主任司書 手塚　美希氏

岩手県紫波町から参りしました、手塚美希と申します。どうぞよろしくお願いいたします。先ほど花井さんの講演の中で、まさか紫波町が登場するとは思っていなかったので、私の緊張もいまＭＡＸになっています。それでは、演目「まち・人・オガール～紫波町図書館の新しい役割～」ということで、お話しさせていただきます。

昨年の８月に町で初めての図書館としてオープンして、まだ１年ちょっとの図書館です。右上にあるマークは今回の図書館を含めたまちづくりのプロジェクト、「オガール」のロゴマークです。オガールとは、東北の方は「おがる」という言葉を聞くと、ピンとくる方もいらっしゃるかもしれません。紫波の方言で、成長するということを意味する「おがる」。そして、駅前エリアにありますので、駅を意味するフランス語「ガール」を組み合わせた造語です。この紫波中央エリアを出発点として成長していくという願いが込められています。

紫波町図書館のロゴマークは、８冊の本が並んで、左がアルファベットのＳ。右がWで、「shiwa」を表しています。よく見ますと、１冊も同じ形の本がありません。これは１冊１冊、この図書館に合うよう選び抜いた本があり、同じ本はないということを表しています。

それでは、紫波町のご紹介をいたします。岩手の県庁所在地である盛岡から電車で 20 分。いわゆる盛岡のベットタウンです。高速の東北自動車道もあり、岩手の空の玄関、花巻空港も近くて、私は東京から単身赴任をしていますが、新幹線、電車を乗り継いでも東京から３時間位という、県内外から大変アクセスの良いところにございます。次に、紫波町の概要を簡単にご説明いたします。人口は約３万 4000 人です。面積は 239 平方キロです。この大きさは、山手線の内側４個分位に相当します。農業を産業の基盤としておりまして、食料自給率は 170%。リンゴ、ブドウ、洋ナシを中心としたフルーツ全般、野菜、米、もち米、小麦、そば、また畜産は、ブランド牛、ブランド豚、そのほか、乳製品以外のすべての農産物があるといっても過言ではないところです。また、日本三大杜氏である南部杜氏発祥の地として、酒蔵も４つあり、ワイナリーもあります。歴史的には、世界遺産となった奥州平泉ともつながりがあるところで、古代から近世までの歴史も深いところです。

このようなインフラも環境も充実した何でもある町で、唯一なかったもの、それが図書館でした。昭和 42 年に町の名誉町民、銭形平次で有名な野村胡堂が寄付したお金で、公民館の中に胡堂文庫と呼ばれる図書室が作られました。その後、「やっぱり図書館が欲しい」という町民の要望で、平成 13 年に市民団体による「図書館を考える会」ができました。それで、教育委員会と協議をしましたが、財政的には図書館を作るのは厳しい状況でした。同時進行で、紫波中央駅前に広大な町有地がありましたが、こちらを眠らせておくのはもったいないとして、公民連携手法により、官と民でつくることで、コストを抑えながら、町の活性化も可能な施設を作ろうという「オガールプロジェクト」が立ち上がり、図書館が昨年オープンとなりました。

先程ニュースが入りました。都市みらい推進機構が実施した「土地活用モデル大賞」で、オガールプロジェクトが国土交通大臣賞を受賞しましたのでお知らせいたします。

私はオガールプロジェクトの図書館部門で、設計段階から関わらせていただいております。平成 22 年７月に、図書館準備のため公民連携室の一員となりました。この公民連携手法、パブリック・プライベート・パートナーシップ、略してＰＰＰの定義はこちらに書いております。図書館の場合は、施設建設の部分を民間へお願いしたことになります。このＰＰＰについて、詳細は割愛しますが、さらにご興味のある方は、ぜひ紫波町にお越しいただければ、担当者よりご案内いたします。

平成 17 年に、協働支援室を設置しましたが、町がずっと行ってきた協働の町づくりの延長線上に、ＰＰＰの取り組みがあるということです。このＰＰＰの手法を使ったまちづくりプロジェクトである、オガールプロジェクトの事業概要の第１弾が、

岩手県サッカー協会、フットボールセンターの誘致です。次に、最も駅寄りの図書館が入っている、昨年オープンしたオガールプラザです。プラザ斜め向かいには、再来年度役場庁舎が移転してきます。また、オガールプラザの向かいに民間施設、さらに、この 10 月より分譲が始まった北側の住宅地は、この地域内でエネルギーを需給する最先端のエコハウスが立ち並ぶ、オガールタウンと名付けたエリアになる予定です。

さて、この官民複合施設のオガールプラザですが、建物は大きく３つに分かれており、東と西が民間、中央部分が公の部分、町が買い上げた情報交流館で、主に図書館と交流館が入っています。次に、オガールプラザの実際のテナントについてご紹介します。図書館以外の交流館には、市民のための多様な貸出スペースがあり、東西のテナントは医療機関や子育て施設、カフェや居酒屋などの買い物スポットもあります。役場が運営する部分、例えば、東棟には町が運営する子育て応援センターがあります。一時保育や学童クラブなど、町外の方も利用できる施設です。なお、この施設は町が借り受けて運営しています。中央の交流館は、市民の活動のための多様な貸しスペースがあります。例えば、こちらのキッチンスタジオ、こちらは料理教室や、食育のイベントに活用されています。そのお隣は市民スタジオです。町で活動が盛んなＮＰＯや市民団体を応援し、また活動の情報を発信しています。市民スタジオは町の協働支援室と市民のＮＰＯが運営しています。オガールプラザの外には、バーベキューができる場所や、東屋などが設置された多目的な使い方ができる広場「オガール広場」があります。交流館を開放して一体で使うこともできます。こちらもランドスケープデザイナーと町、市民が、どんな場所、どんな使い方ができる広場が欲しいか、何度もワークショップを開いて作られたものです。先日、オーガニックフェスタというイベントを実施しました。交流館を開け放して一体利用したのですが、図書館も今までで最高の来館者がありました。

民間棟の代表的なところ、最もにぎわっているところ、紫波マルシェをご紹介します。ここは紫波の農家さん 260 名以上が登録し、農産物や加工品を販売している、町内で 10 個目の産直です。

次に、図書館の内部をご紹介します。入口を入るとすぐに児童フロアがあり、奥に進むにしたがって、開放感のある吹き抜け空間の大人のフロアへ進めるようになっています。入口付近は交流館のイベントスペースがあるためにぎやかなところ、子どもの場所から、どんどん静かになっていくよう配慮しました。一般フロアはＢＧＭが流れ、飲み物を持ち込めて、行きかう人達がコミュニケーションを取りやすい空間づくりをしています。町で初めての図書館ですので、とにかく敷居が低く、従来の堅苦しい図書館のイメージをなくし、今まで図書館に足を運ばなかった人が、立ち寄りたくなる図書館を目指しました。

ほかに図書館内で特色あるコーナーをいくつか紹介します。一つ目は農業支援コーナーです。設計段階から、運営の柱として、紫波の産業を支援するということを掲げております。農業をしている方は勿論、これから農業を始める方、家庭菜園をしている方まで幅広くお役にたてることを目指して、棚づくりやさまざまな取り組みをしています。また、農業のデータベース「ルーラル電子図書館」も自由に使えるようになっています。二つ目は、まちづくりコーナーです。冒頭でも申し上げた通り、紫波町は市民活動が大変盛んで、プロジェクト自体も協働で行っています。これからの活動にヒントになるもの。益々市民がまちづくりに参画できるよう、情報を集めたコーナーになっています。もともと紫波は町の人達誰もがまちづくりに参加しやすい環境ではありますけれども、

図書館は情報の面で中心になりたいと考えております。

運営の３本柱の１つには「0 歳から高校生までと本をつなぐ」がありますので、子ども達と本を結ぶためのコーナーもあります。例えば、幼児向け絵本や子育てをしている家族のための本や雑誌が置いてある「あかちゃんのへや」です。赤ちゃんを抱っこしたり、小さい子を連れた皆さんがフロア内をいろいろ探し回らなくてもいいように、この場所にまとめて置いています。すぐ隣に授乳室と、子どものトイレもあります。先ほどお話しましたが、心地よい空間づくりのため、外のオガール広場の景色を楽しみながら、ゆっくり読書できるスペースもあります。１階のカウンター席は飲み物が飲めますし、２階の読書テラスでは、食べ物も飲み物も持ち込みできます。このように、館内でも子ども達で賑やかなスペース、くつろげるスペース、交流できるスペース、静かなスペースと、一つの図書館でさまざまな居場所ができるように配慮しました。

先ほどのサッカーグラウンドの整備で一番大事にしたことは、選手が直接プレーするピッチ、人工芝だそうです。それでは、図書館は何でしょうか。本は情報そのものであり、それを利用する方を守るための「棚」に投資することを考え、最新の耐震性の本棚を採用しました。もちろん、設計段階で震災が起きたことも関係しています。大人のフロアの本棚は、強い地震が起こると 360 度回転する棚で、東北初のものです。壁面は地震の揺れで棚が斜めにスライドして本が落ちない本棚です。これはＰＰＰの手法で、お金をかけるところと節約するところの最適化が図れたことによるものです。

ここまで、オガールプラザと図書館について概略を説明いたしましたが、ここで紫波町図書館の役割をまとめると、このような図になります。図書館は、生涯学習施設としての機能を十分発揮できるように、基本的なサービスから取り組んでおります。さらに、集会施設の機能を「交流館」として図書館から分離しました。その結果、音楽・演劇・各種講座など、市民の自発的な参加による多目的な利用を可能としました。オガールプロジェクトの中で生まれた図書館の集客能力は、交流館も含めまして想定を超えていました。民間施設から図書館へ、また図書館から民間施設に人が流れるという相乗効果により、経済・産業・コミュニティにも大きな影響を与えることとなりました。情報を収集し、適宜情報を提供することにより、新たな交流を生み出すこと。図書館は情報交流館として、オガールプロジェクトの理念を実践する新しい役割を担うことになりました。

これらの役割を担いながら、実際どのようなことを行っているかご説明いたします。まずは図書館の運営面での特徴です。利用範囲ですが、紫波を中心に円を描いた場合、県内最大の交流エリアになり得る可能性を秘めています。この立地条件の建物のポテンシャルを最大限に高めるため、半径 30 キロ圏内の市町村を含めた 60 万人を交流人口としてとらえています。ちなみにこれは岩手県の人口の約半分です。図書館の利用カードを作成するのはその範囲です。現在、町外の方の貸出は２割となっています。

図書館で行うイベントや企画展示も同様の考え方に基づき、このオガールプラザの中のイベントや、民間・役場各課の垣根を越えて、幅広く連携を行っています。また、公民連携基本計画の理念として、このオガールエリアにつきましては、エリア価値を高めるため景観やデザインにも優れたものを採用しており、図書館内もデザインコントロールを目指しています。

では、どんなことを行っているのか。具体的に、連携イベントの例を３つご紹介します。１つ目は、

図書館・農林課・キッチンスタジオとの連携イベントです。先ほど村山市の図書館の事例とほぼ一緒ですけれども、毎月１回、「絵本の中のクッキング」という絵本の中に登場する食べ物を、親子で作るイベントを行っています。この回は、『からすのパンやさん』という絵本を、私達司書が大型絵本で読み聞かせしたあと、子ども達が好きな形のパンを作って、お店屋さんごっこをして、自分達で売ったり買ったりするという回でした。こちらの指導は、岩手の食の匠の方が、南部小麦などの地元のものを使いながら行っています。

２つ目は、図書館と盛岡の地ビールの連携イベントです。外のオガール広場で、盛岡のビール会社が広場を貸し切って、ビール飲み放題のイベントを行いました。館内では、ビールやドイツ関係の本、また、ビールの本を収集されている方から貴重な資料をお借りして展示を行いました。ビール飲み放題で 2000 円のチケットなのですが、そのうち 100 円を図書館の本の購入費として寄付もいただきました。こういったイベントは、オガール広場という場を使って民間企業がコミュニティを一時的に作り、新たなライフスタイルの提供の場になるという、オガールプラザの使い方の事例です。民間にとってはマーケットですが、町にとっては文化と暮らしをつくることになります。図書館は、それにまつわる情報を提供するという役割です。

３つ目にご紹介するのは、同じ施設内にある紫波マルシェと図書館の連携です。農業支援の１つの形として、マルシェに買い物に来られる方が図書館へ、また図書館に来られる方がマルシェへ行く方法はないものかと考えました。マルシェの店長やテナントの方にもご意見を伺って、マルシェの農産物の近くに、その野菜なら野菜を使った料理のレシピ本のＰＯＰを、図書館で作成して置くことにしました。また図書館内には、野菜やフルーツの実物を置いて、マルシェで紹介している本です、というコーナーを作っています。

次に連携の企画展示を２つご紹介します。「しわの農を知る」。こちらは、農業支援の企画として今年の春に行った展示です。まずは図書館が、農家の皆さんと繋がる機会がほしかったこと。また、町の人達にも紫波の農家さんがどのような思いで農業を行っているか、知ってもらう機会になるのではと考えました。紫波の全１０産直の組合長さんとＪＡいわて中央へ連絡を取り、それぞれ農家さんを５名ずつ紹介していただきました。直接写真を撮りに行ったり、コメントをお聞きしたりして、それをまとめ、パネルにして紹介しました。そして農家さんが掲載されている本や関連する本の紹介も行いました。この展示がきっかけとなり、新規就農者の方が、自分の農場のネーミングを考えるヒントがほしいとか、作っている作物に付加価値となる物語を作りたいということで、今も図書館にご相談に来てくださるようになりました。

もう１つは「わたしの１冊」です。町で卓越した技をお持ちの職人の方、１４名の方からおすすめの本を１冊ご紹介いただき、本と一緒に本人の紹介文、作品を展示しました。全国的に有名な職人の方、例えば船箪笥の職人、著名人がこぞって使う釣竿を作る職人の方、また、江戸時代から続く建具の技をお持ちの方など、たくさんいらっしゃいます。町の良さを知ってほしい、さらに知ることで何か次の展開が生まれるのではと思い、展示を行いました。

デザインコントロールについては、オガールプロジェクトの総合デザイン監修である「ＡＳＹＬ」に、図書館のデザインについても監修をいただきながら進めています。図書館のサイン、パンフ、ロゴマーク、名刺、名札など、小さなものに至るまで、デザインの相談をしていないものはありません。例えば図書館カード、こちらは４色あり登

録の時は自由に選べるようになっています。家族で来られると、それぞれ好きな色を選んで楽しんでいただいています。また、だじゃれですが、末尾が 48「しわ」で終わるカード番号に当たった場合は、スペシャルカードとなります。職員のユニフォームも例外ではありません。本日私が着ております。このユニフォームなんですけれども、盛岡で発注を受けながら工房を構える洋服屋さんと、この図書館や司書の目指すデザインを一緒に考えました。そして地元の洋服店さんに縫製していただきました。デザインコントロールについては、『オガール地区デザインガイドライン』にも詳細が書かれております。図書館だけではなく、このプロジェクト全体のガイドラインになっています。

また、合わせてオリジナルグッズも販売しています。これらのデザインは、人間国宝の芹沢銈介氏のお弟子さんで、小田中耕一さんという紫波町在住の型染め職人の方にデザインしていただきました。図書館バッグ、こちら実物です。こちらは交流館で販売しております。1200 円です。また、ロゴマークをアレンジしたしおりとブックカバーもございます。ブックカバーは、当館のホームページからダウンロードできます。

最後に、今まで紫波町図書館の新しい役割についてお話ししてきましたが、私達がもっとも大事にしていることがあります。それは人が基本にあり、人の活動や学びを応援することです。結局、人がいなければ何も始まりませんし、人の活動、人そのものが好きというのが基本にあります。

野村胡堂の生誕 130 年の昨年、紫波町図書館がオープンしました。この図書館は、人を愛するという胡堂の博愛の精神も引き継ぎました。紫波町図書館は、人の活動のために情報収集・保存・提供を本来の機能としながら、まちづくりに貢献する図書館、まちづくりのエンジンでありたいと思っています。

人・まち・オガールの真ん中に、「も」という言葉を補って「人もまちもおがーる」、そんな場所をこれからも目指していきたいと思っています。

＜全体会（パネルディスカッション）＞

「図書館サービスのこれから～情報と交流の拠点をめざして～」

コーディネーター

ＮＰＯ法人オブセリズム ＣＥＯ　花井裕一郎氏

パ ネ リ ス ト

秋田県立図書館 情報サービス班主査 嵯峨　進氏

豊中市立岡町図書館　司書　西口　光夫氏

村山市商工文化観光課　課長補佐　奥山　典子氏

岩手県紫波町図書館　主任司書　手塚　美希氏

助　言　者

社団法人日本図書館協会 常務理事　山本　宏義氏

○花井氏

はい、おはようございます。台風はそれたみたいですけど、天気はあまり良くない中で、２日目、元気よく進めて参りたいと思います。

今日の僕の進行をご説明しますと、まず昨日の全体を振り返りまして、山本先生に一言いただいて、その後それを聞いてみんな反応を示してもらう。あと、またその中で昨日言い足りなかったこととか、僕が「最後にお見せします」と言ってお見せできなかったアプリを見せたりとかですね、皆さんの言い足りないこと、そして質問へ入っていきたいなと思っています。少し質問を今日、昨日の段階でいただいたものから質問にお答えをさせていただいて、あとはできれば会場の方からですね、挙手でご質問をいただきたいなと。挙手がない場合は、こちらから指名します。よろしくお

願いします。パネルディスカッションを盛り上げるも盛り上げないも、これ質問にかかっていますから、ぜひよろしくお願いいたします。最後にまとめに入っていきますので、それで11時まで皆さんとこの時間帯を楽しくやりたいなと思います。それでは早速、山本先生、昨日を振り返ってどうでしょうか。

○山本氏

昨日夜の交流会、情報交換会ですね、斎藤館長さんをはじめ、山形県の皆さんにいろいろご準備いただいて、本当にいっぱいいただきました。もう満腹です。心のこもったおもてなしで、感謝をしているところです。それと、その交流会での満腹もそうですが、その前の花井さんの基調講演、それから4人の方の事例報告。皆さんもお聞きになって、本当に盛りだくさんでお腹いっぱいになられたんじゃないかなと思います。そこで、私なりに感想を、なんで満腹したのかという事ですね、少しお話をしたいと思っております。

初めに、昨日花井さんがご紹介されました本の中の1つに、『知の広場』という本、私もずいぶん感心をして読ませていただきました。著者のアンニョリさんは、イタリアで30年以上に渡って図書館の仕事をされ、それからヨーロッパ、アメリカを含めて、各地の図書館を研究された方で、この本は、ロンドンの図書館とイタリアのベーザロという図書館の計画に参画した経験を紹介している本なんです。

ロンドンの図書館は、タワー・ハムレッツという移民の多い地区だそうですが、そのような関係のためか、それまでロンドンの中で一番図書館利用の低いところ、イギリス中で一番失業率の高い地域だったそうです。その現状を打開するために、自治体が「新しい図書館をつくろう」ということで、それに協力されたということですね。

そのとき、幾つか図書館側で作られた視点がありまして、商業施設でよく用いられている資材や設備を利用するとか、斬新な色づかい、明るい色の利用。リフレッシュする場、カフェテリアの設置。それから大事なのは、スタッフは事務所やカウンターの後ろに固まっているのではなく、散らばって館内を歩き回るとかですね。それから、「アイディアストア」って、これ図書館の名前ですけど、そのロゴマークを作って、いろんなところに付け、またロゴを付けたグッズを売るとかですね、誰でも入りやすくて寛げる。そういう図書館をつくって、予想どおり、いままで見向きもしなかった人達が、図書館にどんどん入ってくるようになったというようなお話です。

もう1つの、ペーザロというのはイタリアの町ですけれども、その一角に歴史地区といいますか、古い修道院があって、それを一部は住宅に利用し、一部を公共施設ということで図書館にということになったようです。その修道院を改装して、新しい図書館に作り替えるという仕事をされた。商業的でもなく、居心地の良い場所「みんなの場所」というコンセプトを決めて、それに基づいてブランドイメージのある図書館にしようということで、例えばミニコンサートだとか、講演会、映画会、そういうこともできるフレキシブルな空間づくり。あるいは静かに勉強する場ではなくて、人と出会える場にする。そんなことを念頭に改装されて、非常に好評を得たことが紹介されています。最後に、この本のまとめとして、17 の忘れてはならないポイントということをお書きになっています。今17項目全部言えませんが、例えば、1番目が「図書館が柱となり、市民を巻き込み動かすこと。図書館は小学校、警察、消防団と同じように、その地域にとって必要不可欠な機関である。市民の声が図書館に届くように運営し、行政が問題に取り組むように仕向けること」。2番目、「その地区、

町、国の生活に合わせること。どんな地域でどんな人が住んでいるのかということに注目をすること。特に、図書館に来ない市民に気を配ること」。それから３つ目が、「丁寧な分析から出発し、どんな人が利用者となるかを理解すること。非利用者の持つ図書館のイメージについて、調査・研究を行うこと」。４つ目が、「変化に抵抗するのではなく、一体となりできることなら変化の一歩先を行くこと。グーテンベルグ世代とｉＰａｄ世代との間にある深い溝は、どうしたら埋められるのかよく考えること」。そんなことで 17 項目、ご自分のまとめとして紹介されています。

こういうことを読む中で、今回の研究主題のサブテーマが「情報と交流の拠点をめざして」ということですが、アンニョリさんがおやりになった仕事も重ね合わせて考えますと、情報と交流の拠点としての図書館について、２つの側面があるのではないかと思いました。１つは、広場として人を呼び込むということ。これについては、昨日の事例報告でたくさんございましたけれども、皆さん工夫されて取り組んでおられます。それからもう１つは、図書館が柱になって、中核になってといいますか、まちづくりの役割を果たしていく。こういう２つの面が考えられるというふうに思うわけです。そういう面から、昨日の報告を聞かせていただいて、私なりに感想、そしてもう少しお聞きしたいというようなことを申し上げますと、まず花井さんのお話は、本当に私もすっかり聞き惚れてしまったんですが、その中で、１つは人を招くという点では、ワクワクする広場になるようにということをおっしゃっておりました。タイムシェアをしよう。あれなんかは、人はいろんな目的を持って図書館に来る。だけども、それぞれ目的に分けてしまうと、同時にその目的を果たすことはできない。一方、昨日おっしゃったように、その人達を少しずつ相手に配慮しながら、タイムシェアができるのではないか。そういう発想というのは、非常に目新しく、私なんかも今まで思いもしなかった。本当に図書館が１つの町で、出会いの場になっているなということをつくづく感じました。

それからもう１つ、ストレッチの本を借りていった年配の方が、家でストレッチの本を読んでも全然分からない。だけども、図書館の司書さんで健康運動士という特技を持つスタッフの方がいらっしゃって、実際に図書館の中でストレッチを「こうですよ」とそのとき居合わせた図書館の利用者の方々に指導する。その後ストレッチの本を借りて帰っても、本で解説された体の動かし方がすっと判かるということをおっしゃいました。これなんか非常に大事な働きだと思います。余談ですが、この夏にシンガポールで行われたＩＦＬＡの大会に行きました。行く前に同僚が書いたシンガポールの国柄だとか、物価状況だとか書いた本を借りて勉強して行ったんですけど、あんまりね、頭に入らない。ところが、帰ってきてそれ見るとね、「あっ」と分かる。本当にね、そういうことが今まで図書館では少なかったと思います。

それともう１つ。小布施では、まちじゅう図書館ですね。私も今年の３月、お邪魔して拝見しましたが、これは素晴らしいですね。それから、情報のハブになるということもおっしゃっていました。こういうところが、図書館が核になってまちづくりを進めていく、そういう働きが具体的に紹介されているところだと思いました。

事例報告では、秋田県立の嵯峨さんから、県立図書館という性格もありますので、地域の人達をということでは必ずしもないんですが、情報を通して繋げていく、情報の広場といったらいいでしょうかね。そんなふうに私は受け止めました。それで、手持ちの資料のデジタル化は、割とたくさんの図書館で実施されております。各地の図書館

で電子書籍の利活用は、少しずつ広がってきておりますが、大部分は民間の出版社、あるいは誰かが作った物を購入したり契約をして図書館の利用者に提供することが多いんです。しかし、秋田の事例では、ご自分のところでお作りになった、自分達でデジタル化した資料を、電子書籍として県民の人に使ってもらうスタイルを作り上げられたということに、私は感心しました。

この際、もう少しお聞きしたかった点を申し上げますと、ご自分の今後の課題のところにもお書きになっていますが、利用可能な資料の更なる充実ということですね。これは当然どこでもあるのですが、昨日紹介された資料を見ますと、歴史読本とかですね、これなんか年配の方、非常にファンがいらっしゃる。それからモーターファンもそうです。これも素晴らしいなと思うんです。それと合わせて、子育て健康シリーズというのを電子書籍として提供されている。いま、子育て支援は非常に大きな課題ですから、そういう意味でこれを選ばれたとお聞きしましたが、今後どういうものを電子化資料として充実していくかという点について、どんな展望をお持ちになっているのかについてもう少しお話しいただければと思いました。

その次は、豊中の西口さんですね。西口さんのお話の中で、私一番感心したのは、ボランティアからサポーター、そしてエディターというふうに、名前が変わってきた。そのことを３か月かけてとおっしゃったんですかね。３回議論を積み重ねて、そういう結論に達した。そういう丁寧な取り組みというのは、非常に素晴らしいと思った。ボランティア、それからエディター。皆さんもお聞きになって、どうお感じになったでしょうか。エディターというのは住民が主役ですよね。自分達が作るという、そういう位置づけをされた。これは非常に素晴らしいことだと思うんです。歴史というのは、「ある」ものではなくて「なる」もの。ある意味で作る、作ると言ったらちょっと言い過ぎですが、ただ事実が並んでいるから歴史だということでは決してないわけです。それをそこに住む人達がどう受け止めるか、どう見るかが歴史なので、それをそのエディターといわれる市民の人達が中心になって、自分達の歴史を、ある意味で作っていく。これは自分達のまちづくりですよね、まさしく。これを図書館として応援をされているというのは、素晴らしいと思います。ただ、そのエディターという活動が、どの位これから広がりを持ち得るのかというあたりの展望みたいなことを、もう少しお聞きできればと思いました。

その次は、村山市のお話でした。ここにこんな立派な複合施設ができて、そこに立派な図書館が出来ています。建築の準備の段階から市民を巻き込んで、それから図書館サポーターも巻き込んで、甑葉（しょうよう）プラザ市民委員会というものを立ち上げて、本当に市民と一緒に作り上げ、市民の活動の拠点としての在り方を探ろうとした努力といいますか、それを感心しながらお聞きしました。開館してからはいろんな事業をおやりになっていまして、贈り物事業とかですね。それから読書シティ宣言をおやりになった。それから年間を通して、ユニークな事業をいろいろ展開された話をお伺いしました。その中で、まちづくりという面では、図書館の利用カードですね。つまりお店に行って、図書館の利用カード見せると５％引きとかですね。これはまさしく、その商店と図書館が、一体になってまちづくりを進めている。資料を見ますと、最初２５軒だったのが、いま４１軒参加してくださっていますね。これをどんどん広げて、図書館がそういう市民のつながりの発起人といいますか、核になる働きというのは、これ素晴らしいと思います。今後、他の市の機関や団体とのどのような連携の在り方が想定されるのかというあたり、もう少しお聞かせいただければと

思いました。

それから、最後が「まち・人・オガール～図書館の新しい役割～」という紫波のお話でした。ここは公民連携というのが非常に大きなキーワードになっていまして、多様な施設での相乗効果といいますかね、こういったことが紹介されたわけです。「人が好き」、それから「エンジンになる」ということをおっしゃっておりました。そのエンジンになるという時に、コミュニケーションと連携とか、情報の再編集、それから最後に仲介者としてというふうにご紹介をされていましたけど、昨日のお話の全体を通じて、図書館の職員について話があまりなかったので、図書館の職員の構成、それからどういう人材がそろっているのか。その人達がどんな働きをしているのかというところ、もう少しお聞きできればと思います。

最初の花井さんのお話の中では、小布施の図書館にはこんないろんな能力とか資格を持った人達がスタッフとしているんですよということをご紹介いただきましたけれども、おそらく紫波にもそういう人材がたくさんいらっしゃるんじゃないかと思うんです。そういうことをお聞きすると、他の図書館で仕事する時に役に立つのではないかと思いました。

幾つかの感想と、もう少しお聞きしたいことを申し上げましたけど、私の方からは、以上とさせていただきます。

○花井氏

ありがとうございました。本当に丁寧な解説でありがとうございます。１つ１つ全部質問が、先生から入っていますので、まずは秋田、嵯峨さんから、どうぞ。

○嵯峨氏

はい。秋田県立図書館の事例発表をまず踏まえまして、資料の充実について、の質問をいただきました。昨日お話ししました通り、現在の図書およびバックナンバーと当館の画像化した貴重資料も全て合わせて約 2000 点の資料をまず閲覧できるようになっています。当館で貴重資料の画像化したものを除いて、650 冊の方。こちらは書店さんの方でパックされた雑誌のバックナンバーや書籍になるわけですが、こちら決定するにあたりまして、初めてのことであったので、今回の図書館向けの電子書籍のシステムを立ち上げるにあたって、関係する団体との権利交渉を、まず図書館の方で、電子書籍の貸し出しを始めたいのですけど、とイチから話し合いを始めまして、承諾を得て、皆さんに利用していただけるようになったのがこちらの中身になっております。一般の書籍であれば、本屋さんから本を買ってきて、装備して棚に並べれば貸し出しできるのですが、電子書籍はまだまだ皆さんに提供するまで簡略かつ気軽な、手続きの段階でそこまでいってないのが、現実的なところです。本であれば、図書側が「これ買いたい」あるいは「これが利用者に利用されるのではないか」と、どこでも図書館の職員が選書するわけですが、電子書籍に関しては、選ぶ幅がまだそこまでいってないのが本当のところです。図書館で働く人間として、電子化したい希望はたくさんありますが、まだまだ権利者、システム、図書館の３者が合意に至らないと利用できないという現状があります。昨日の小松左京さんの例では、秋田と縁もゆかりもない大阪の方です。なぜ決まったかというと、システム会社さんと、小松左京さんの事務所とのコネクションがあったためでした。その関係やタイミングがあって、うちの図書館が全国で最初に公開させていただいたという流れになっています。もちろん秋田県出身の作家の方もいらっしゃるので、そういう方々の書籍もどんどん提供したいという希望はあるのですが、現状は、

選書の前段階でまだまだ課題が多いということが正直なところです。

○花井氏

ありがとうございます。今の関連で、僕の方から質問ですが、先ほど山本先生が秋田自体で電子化されていると言われました。今後、アメリカの電子図書システムが図書館に入ってこようとしている現状もありますよね。既存の日本の民間のもありますし。そういう一般図書の電子図書の貸し出しシステムが入ってきた場合に、いま秋田で作られている物とのコラボレーションとか、もう全然別にするんだとか、そういうのを何年か先のものを考えるなんてありますか。

○嵯峨氏

ここまで来て大変恐縮なのですけど、正直申し上げて私直接の担当ではなくてですね

○花井氏

山崎さんに。

○嵯峨氏

山崎さんに、そう。本当に詳しいところについては、もう山崎副館長が統括してるところではあるのですけども。

○花井氏

できれば、会場のマイクをちょっと用意していただければ。一番いいところに座っていますから。

○山崎博樹氏（秋田県立図書副館長）

秋田の山崎です。こんなに早く呼ばれるとは思わなかったんですけれども。いま折角のご質問ですので。電子書籍の今後ということですよね。当館の場合には、図書館専用の電子書籍なんです。ほかの一般に売られているものではないです。それはシステム会社とか出版社と協力して、図書館向けに作った電子書籍です。これは現在６５０点ですけれども、実質ではもう１万点ぐらいあります。私どものお金の問題が難関化してということになります。それから花井さんのおっしゃったのはオーバードライブ社の話ですね。その部分については、フォーマットの問題とかシステムの問題が絡んでくるので、いま日本では、電子書籍の交換フォーマットの話が出ていますが、相互に伝える形のフォーマットをこれから考えていこうという姿勢です。私どもの場合には、今画像のフィクス型という電子書籍を作っていますので、これはどちらかというとテキストから起こしたものではなくて画像から起こしています。なぜこの方を考えているかというと、図書館というのは、元々ロングテールな資料を扱っていますから、新しいものを電子書籍として提供するのではなく、むしろ今まで図書館が多く扱ってきた古い資料です。文献とかですね、そういう資料を提供する。これはなぜやったかというと、出版社と書店との競合を避けたいということです。今全国で 17 の図書館が電子書籍を提供していますけれども、基本的に民間に売っているものと同じです。私の考えでいくと行政のレストランが同時に開店している状況です。ただし、電子書籍はとても強力なものですから、そこは少し避けたいという思いがあって、こういう形になっています。それから山本先生からもちょっとお話ありました、今後ということですけれども、私今一般に考えているのは、１つは地域資料の電子書籍化ということで、いまデジタルアーカイブというのは６つから参加させていただいていますから、それを電子書籍の形にするということを今考えています。具体的にはもう 11 月にはそれを公開する予定になっております。実際にいろんな機関でいろんなリーフレットとかパンフ

レットを作られていますよね。結構お金かけられて、例えばそれが 30 点とか 40 点とかって。そういうものが地域の中で 100 部、200 部配られて終わってしまう。図書館にその数量だけあるということがある。そういうのはアーカイブの中にはめ込んでいますので、そういうアーカイブから電子書籍の形にするということを考えています。ですからアーカイブと電子書籍は、むしろセットにお考えいただければいいと思います。基本的に私は「航空母艦と艦載機」の関係としていつも話しています。航空母艦がアーカイブで、要するに電子書籍が艦載機として、そこからいろいろ発信していこう。

それから有料のものについては、電子書籍図書館推進協議会というものを作りました。ここにいる方々何名か入っていただいていますが。これは出版社と、それから図書館が話し合う場です。今まで図書館と出版社の方が話す機会は、本当にないんです。地元の出版社の方とは話したりしますが、大手の出版社、例えば講談社とか角川とかと我々が話す機会は中々ないです。そういう会をこれから作っていかなきゃいけない。これは電子書籍という１つのツールを使った交流の場になったわけです。そのセミナーを丁度、来月紫波町と東京でやります。そういう機会をなるべく設けて、出版社と我々が共同して、電子書籍というものを作っていく。これが図書館の新しい道だなというふうに思っています。このことによって、競合を避けながら、要するに私達と出版社が競合を避けながら、お互いに合った文化を含めて、それから電子書籍というものを日本に普及させる。今、電子書籍という黒船が来てるんです。これは図書館レベルの話ではありません。日本でも出版デジタル機構というものを作りましたが、ほとんどがコミックになりました。それから既に他の図書館でおやりになるところも、実際に選べるのは 5000 点位です。青空文庫が多く入っています。ですから非常に選択の幅がないので、今は私達は図書館向けの電子書籍をもっと増やしていってほしい。ただ出版社は抵抗している面もあります。そうですよね。我々に売ったら一般消費者に売れなくなりますから。そこを避けるためにやはり違う道を選んで、その道を少し広げていくというのが、これからのスタンスで考えていきたいと思います。

〇花井氏

ありがとうございました。いいですね。会場にも答えられる人がいてね。次は自分の番かなというような。得意分野があったら先に言ってくださいね。発言していただきますから。じゃあまた西口さんの方に先ほどの質問をお願いします。

〇西口氏

はい。エディターの今後というか、展望ということなんですけども、エディターのことをもう少し説明した方がいいかなということで、昨日写真を見せたいがために、真ん中をかなり端折りました。それでエディターのことをもう少し説明したいと思います。エディターさんなんですけど、豊中市と箕面市で今合同でやっていますけれども、当初は文科省の予算がきちっとついていましたので、１人来るたびに交通費をしっかりお支払いもできました。その会計中々しんどかったですけど。年代は若い人もいらっしゃいましたし、団塊の世代の方が中心かなと思っています。最初１年目は箕面と豊中を合わせて 30 名弱いらっしゃいました。けど２年目になりますと、交通費はもう支給しないということになり、３分の１はパッといなくなる。僕は当初の予想では、30 人から５人位残ればいいなというイメージで仕事していたんですが、いま 10 人位、豊中と箕面でなります。その後新しく入ってきた方も含めると、12, 13 人位かなと思い

ます。

広報で募集したりと、１年目は華々しくやったんですけども、２年目は年に１回だけ、広報枠をいただいて、「こんなことやっているから一緒にしませんか」みたいなことをやったり、ホームページに「一緒にやりましょう」みたいな形で用意して、市の電子申請のサイトをお借りして公募をしています。５人ほど電子申請がありましたが、途中で介護のため参加できないとおっしゃる方もいます。今でもメーリングリストには全員入っているんですけども、１回人数がガタッと減った時に、メーリングリストどうしましょうとなりました。それで、私からお電話を掛けて「どうしましょう」と言うと、「いやいや、また落ち着いたら参加したいから、とりあえず情報だけは投げといてくれへん？」ということで、メーリングリストはちゃんと見といていただいている、たぶん。時たま図書館で、介護の合間にお会いすると、またちゃんとホームページもファンとして見ていただいていて、「更新されていたね」とかいうことで、本当自分のペースできっちりと参加していただいているのかなというふうに思っています。

システム上も問題があって、今度の３月に改編しようとは思っているんですが、エディターの中には歴史に詳しい方もおれば、コンピュータシステムにものすごく長けている方がいらっしゃいます。改編あわせてその前に「プロトタイプを作っちゃえ」みたいなことで、この間業者を決めるプロポーザルがあったんですけれども、それに合わせてコンピュータに詳しい方が中心となって、この４年間できなかったことをまず仕様書までとはいきませんが、要件を羅列しました。そして、ベンダーに言葉で説明しても伝わらないので、プロトタイプを作成していただきました。その URL をベンダーに伝えました。余計なものは付けず作ってほしいのですが３月にならないと分からないですね。また、ほとんど図書館にこられない方ですが、ただシステムのことについてこうだとか、デザインをちょっと変えてくれたりとか、「アイコン作ったから、こんなん入れへん？」とかですね。自分の本当に得意分野で、そういう形で参加をしていただいている方もいらっしゃいます。

今必ずページを更新すると、激励のメールも来るんです。中にはこれもエディター候補だなと思っています。ある写真をポンと公開したときに、年代が分からなかったので、1980 年代みたいな書き方で、言葉を濁して説明を書いたんですけども、すぐメールが来まして、「80 年代とは何や」と。「後ろに看板あるやろ」と。「ナショナルの看板あるな。そこにエアコンのＣＭがあるやろ。パナソニック聞けば分かるだろ」っていうメールが来るんですね。「ちゃんと調べろ」。「分かりました」と。すぐパナソニックにメールをして、「こういうサイトを運営しているこういう人間ですけれども、この看板から年代が特定できませんか」というふうに送ると、パナソニックさんもお客さまサービスコーナーは充実していますので、翌日には返ってきまして、「その看板は加山雄三さんですね」と。「1983 年から 85 年に、発売された型です」と。それで「1980 年代というのは間違っていません。当時、男性でエアコンのＣＭをしていたのは、加山雄三さんしかいらっしゃいませんので、おそらく 83 年。撤去が遅れたとしても 86 年ぐらいまでに絞れるんではないでしょうか」ということで、その回答をいただいて、フォトエディター候補の方にもメールを送って、「市民が編集していますのでできる限り急いで更新します。パナソニックからこういう回答を得ましたので、ページ反映させたいと思います。」と回答しました。この方々もファンなので、場に参加できなくても、もうちょっとサイトの中身を工夫して、何か投稿あったらわざわざメールを立ち上げてメールを送信ではなくて、ご意見箱

みたいなサイトを用意して、投げていただいて、それを吟味できるようにできればきっともっともっとコアなファンが増えていくかなと思います。

あと、問い合わせがあったのは、「ジオラマを作ってる。豊中駅の」と。昭和30何年、えらい限定的なんですけど、「昭和 30 何年のジオラマを作っているので、昭和30何年の豊中駅の写真はないのか」と。「しかもこの角度が欲しい」と。それでよく似たサイトとか、近所の豊中市内の写真屋さんが、そういうのを固めて集めていただいているサイトがあるので、そちらの方をご紹介させていただいたりということも最近ではあるかなと思います。フォトエディター同士でも、化学反応を求めている方もいらっしゃいますし、先ほど言いましたように、自分の得意分野でサイトの方に力を貸していただいているという方もいる。今後も多種多様な人がITを活用しながら参加し事業を進めていければと思っています。

○花井氏

はい、ありがとうございます。では、奥山さん。

○奥山氏

はい。ほかの施設との連携はというようなお話だったと思います。まだ新しい図書館が開いて３年。今年４年目ということで、まずは中での連携をと考えておりました。それで平成15年ぐらいから、小中学生の読書を充実しないことには、将来読む大人が増加しないと、市内の小中学校との連携強化を核にしてずっと進んでまいりました。学校とは、基本的な連携はできつつあるかなという部分はありました。

そのほかに、今の図書館ができるまでは、ホームページは簡素だし、ＯＰＡＣもなかった。外に発信する機会が殆どないまま、大正時代の建物でやっていました。ですから昨日の話の中で、放送大学サイドから、「村山で展示会やりませんか」と持ち掛けていただいた、それは「世の中変わっちゃった」ぐらい、変わったのを驚きを持って実感したことです。その関連で、山形に放送大学学習センターがあるんですが、そことつながりができたことを生かし、甑葉プラザの２階にメディアルームという一人ずつパソコンが使えるスペースがあるので、サテライト学習センターみたいなのを設置できないだろうかと考えていたところです。さらに、放送大学の学習センター長さんが、山形大学の教授でいらしたことから、「大学とも連携しましょうか」という話も盛り上がりつつありました。今年の異動で、ちょっと残念だったなと思いましたが、そこは後任の方に引き継いでいただき、学術研究機関とリンクしていく方法もあるなと考えています。

今、お話していてスコーンと抜けている部分がありました。高校との連携です。地元に２つ高校があるんですが、地元の高校との連携が割と薄かったんですね。やはり村山市の市立図書館ですから、できるだけ地元のところから始めるということをまず考えていかなければいけないかなと思っているところです。近隣の小中学校からは、随分たくさん利用していただいて喜んでいただいています。もっともっと市民とまたは市内のほかの施設、例えば、市役所内部もそうなんですけど、昨日もお話したようにまだまだ薄いので、まず市役所に図書館を認識してもらう。いろんなところを巻き込んで考えていく必要があると思っております。それができれば、「読書シティ村山」が実質的に大きく広がっていくのかなと感じております。

○花井氏

市役所の方、大丈夫ですかね。人事にも問題ないかな。これはいろいろあるから、事情があるかと思いますけれども。本当になんかの連携って僕もそうですけど、僕は逆に苦い思いをたくさんし

て、中の連携がなかなかできなかった。反省するばかりです。僕は持っている箱がないので、辛いとこがありますけど。でもこれからそうやってこういうところで、どんどん中の人とのコラボレーションも図っていただければ、多分同じ思いの方たくさんいらっしゃると思うので、いいなと思いますね。

○奥山氏
この機会にですね、今まで本当にヨチヨチ歩きの３歳の村山市立図書館ですので。

○花井氏
どんどん言っといた方がいいですよ。

○奥山氏
ぜひいろいろな場面でお声掛けいただいて、また情報発信をできればいいなと思っております。この機会をありがたく思っております。

○花井氏
はい。では手塚さん、お願いします。

○手塚氏
はい。昨日のお話の中では、運営面のスタッフのことを全くお話していなかったので、今日ご説明するちょうど良いところだったと思います。当館のスタッフですが、実は協働ということになっております。図書館専門のＮＰＯなんですけれども、地元の「ＮＰＯ紫波文化交流」という団体が一部業務委託ということで５名スタッフとして入っております。それに加え、私を含めた４名の司書が入り司書が９人という形で運営しております。花井さんのお話にあったようなスタッフのいろんな特技・スキルを持たれた人材ということですけれども、こちらは司書の資格を持っているということを条件に採用をさせていただいたというところで、まだ個人の秘められた特技というものが発揮できる場面がありません、私達の図書館もまだ開館１年目ということもありまして。経験者がほとんどいない図書館ですので、基本的なサービスというところを積み上げるといいますか、そこのところをいま頑張ってやっているところです。。

○花井氏
５名のＮＰＯの方というのは、そのＮＰＯはどういうふうなものですか。

○手塚氏
昨日の発表でもお話ししましたが、約 10 年前から市民の方で「町の図書館が欲しい」と活動をされていまして、勉強会も教育委員会と一緒にして積み上げてきたんですね。その会の方達の一部が運営にも関わるということでＮＰＯが立ち上がりまして、その方達と一緒に、図書館の専門の職員が関わりながら、いずれは地元の方達で図書館を運営できるようになればいいなと、今一緒に図書館を創っているという状態です。

○花井氏
素晴らしいですね。じゃあ全部で９名で運営している。館長。

○手塚氏
あ、館長もおります。会場の方におります。すみません、館長。

○花井氏
これちょっと僕、紫波見せてもらった時にすごく面白いなと思ったのは、交流のとこと図書館が別々ですけど、管理されているのは、マネジメントの館長一人でやられていて、業務を仕訳けされ

ていて、面白いなと思ったんです。それも最初から狙いとしてあったんですか。

○手塚氏

そうです。そちらの部分は図書館で担えない部分であるので、交流館部門と図書館部門というふうに分けて、交流館の部門は専門の職員がいて。

○花井氏

そっちは何名。

○手塚氏

そちらは４名です。そちらの交流館も協働の形になっているんですね。こちらも民間と町が一緒に行なっています。

○花井氏

交流館専任で４名もいるんですか。2 つの部門を統一して運営する苦労とか、逆に面白さとかいうことについて館長から。館長、出番です。

○工藤　巧氏（紫波町情報交流館館長）

岩手県紫波町の情報交流館館長の工藤と申します。一応図書館長という形で今日は出てきておりますけど、実は辞令をいただいていないんですよね。不思議な館長でございます。なぜかというのは、これが行政の縦割り組織の弊害といいましょうか。今うちの図書館は、町長、首長部局のもとで、実際には運営されておりまして、教育委員会とややしっくりいっていないという状況なのかな。でも、一番大事なことは、来館者の皆さんがたくさん来て楽しんでいただければいいのであって、私の肩書はどうでもいいと思っております。それで、交流館が分離になったというのは、やはり図書館の中の集会施設としては、利用のされ方に限界があるし、結構空いている時間もあるんじゃないかということと、維持管理費がかかる。図書館は無料の原則みたいなものがあって、本来は本を貸し出すところだけなんじゃないかなと私は素直に法律読めば解釈するのであって、集会施設までタダで貸す必要はない。というよりはむしろもっと広く交流活動を広げるために、集会等を行う専用の施設、交流館を立ち上げた方が良いと考えております。交流館は、スタジオという名前で、小スタジオが２つ、中スタジオ、それからアトリエ、大スタジオという形で運営されております。もちろん有料です。有料で使うということは、その使う市民に責任感が生じますよね。お金払っているからなんでもできるということではなくて、そこはきっちり使って頂くということになる。ですから、スタッフ４名体制に花井さんは多いなと思ってらっしゃるようですけど、図書館は、勤務時間は９時から夜の７時までです。ところが、交流館は夜の９時半まで開いておりますので、実際４名で運営するのは非常に大変なんです。なぜかというと、大スタジオで、今日のようなイベントの場合はマイクの準備だけですが、音楽をやる場合、例えば、コンサートやるといった時には、出演グループが５つあるとすると、５ステージ分のマイクのセッティング、スピーカーのセッティング等やんなきゃいけない。そこまでサービスしてあげないと、ちっぽけなスタジオだけれども、本格的な感じが味わえないわけです。中学生から 60 過ぎた親父バンドまで来ますから、そういう方々にいわゆる体育館でやっているような感じではなくて、ステージで演奏している感じ、本物の感じを提供してあげて、そこから夢が実現できるような、そんな取り組みをしているというのが交流館の役割です。使用料安いです。だから市民が勝手にいろんな活動をしている。イベントを入場無料にすると、さらに使用料が安くなるから勝手にやるんですよ。そうすると 12 月はやっぱり、「クリスマス

コンサートやりたい」。でも下手くそなんですよ。この間は庄野真代さんだったかな。やっぱりプロは全然違う、一人でも全然音の響きが違う。アマチュアバンドは自己陶酔型で、それはそれでいいんだけれど、そういう場を経て、みんな研鑽されていくのかなと思っております。

そういう中で、音楽に限らずそのいろんな講座が、自然発生的に幾つもできてきて、もう本当に交流館のコンシェルジュ、総合案内の中でも把握しきれないぐらい次々と発生して、それはもう願ったり叶ったりですが想像以上に活用されています。そのために、運営を整理するＮＰＯを作って情報センター的役割をしている。それでいろんな情報が蓄積されています。やっぱり図書館と交流館を分けたのは成功だったと思います。

これからは、図書館と交流館がうまくリンクした事業を我々とすれば、やっていかなければならないと思っております。情報交流館という名前なのに内部の情報がうまく伝わってこない場合があります。例えば、図書館研究会というイベントがあるとしたら、やっぱり図書館の方では企画展をやりたいとか何かあるわけなんですけど、情報がちょっと遅れてきたりするというところが、今のところ悩みといいますか課題です。

それからもう一言最後に、付け加えさせていただくと、先ほどは運営体制のことをお話しました。紫波町の基本は、町の中の人材だけでなく、人材を外にも求める。紫波町の図書館は、町民の作る会からのご提案もいただいていますが、外の人材のアドバイスもいただいて、基本構想から設計、運営までいろいろな場面で活用しております。また、オガールプロジェクトそのものも、デザイナーの方、それからランドスケープのデザイナーの方、プロジェクトをまとめるコーディネーターの方、すべてそれらは町外にある。要は町外の人材をいかに活用するかというのが紫波町のスタンスなんです。優秀な方々を見つけてきて、どうか安い賃金でお願いしますというのが、私の仕事なんです。

○花井氏

ありがとうございます。やっぱり開館時間が長いと大変ですよね。僕達のところは８時までだったんですけど、僕含めて１３人の中で、４名が企画班というところで、あまり貸出しとかにはタッチしないところですが、ほとんどフル回転してても時間が足りなかった。まず企画をどんどんやっていくという、僕達には交流館はなかったんですけれども、そういう中では、けっこう働く人達の大変さがちょっと伝わってきたかなと。ありがとうございました。

では、山本先生の質問にほとんどお答えになったと思うんですけど、今のお話を聞かれて、どうでしょう。

○山本氏

奥山さんにもう少しお尋ねしたかったのは、昨日の話の中でも「図書館というのが本当に知られていない」ということをおっしゃっていましたけども、折角新しいポストにいらっしゃったのですから、今までの連携してきた団体とか施設ということを超えて、確かに商店街の話は出ましたけど、例えば、農業の関係のグループだとか、そういうところともう少し繋がりができるようなことがあるといいんじゃないかなと思いましたがいかがでしょうか。

○奥山氏

ありがとうございます。本当に私、教育委員会の中にいると、どうしてもそこから飛び越えられないという部分があったんだなと、今回外の世界を眺めさせていただいて、いろんな団体があるん

だなと実感しています。商工文化観光課管轄だけでも、金融機関、観光物産協会、商工会、土地改良区、そういった本当にいろんな関連する団体があって、こういう人達にもっともっとお知らせしていくと何らかの形でもっと役に立つ施設として認識していただけるのかなと。こちらからのアプローチが足りなかったなという思いです。

ただ、開館してこれまでの３年間は、とにかく中をなんとか活かしていきたいというところに力を注いできたところです。これからの課題として外にもっと行ける伸びしろをいまご提言いただいたということで、村山の人達も聞いていますよね。市役所関係の人もいますし、生涯学習課には外との連携が得意な人たくさんいるので、ぜひよろしくお願いします。ということで、進んでいければいいなと、今みんなそういうふうな気持ちで聞いているところではないかなと思います。

○花井氏

ありがとうございます。では少し言い残したことと言いますか、僕がまず言い残したことを。「地図ぶらり」というのを、昨日紹介するのを忘れてしまったので。地図を使ったアプリです。例えば、「高遠ぶらり」。これは長野県の伊那市というところが提供しているんですが、この中に高遠各地の古い地図、たくさんの古い地図を使っていまして、古い地図の中にピンを打っているわけです。このピンを触ると文字が出てきて、ここの場所の情報が出てくる。また、写真なんかも入れ込んで、図書館とか美術館とかが得意とするアーカイブをアプリの中に入れてやっていくという。これの面白いところはどんどん更新できるので、ワークショップができるわけですね。伊那市は、アプリの地図上にあるピンの場所にリアルピンというのを作って町の中に置くんです。町の中に置くと、それをみんながおじいちゃんが孫と一緒に回っていって、新しいものを発見したら、本部に報告して、それをまたアプリに全部反映して、アップルの申請がいるんですけども、申請してまたバージョンアップ、バージョンアップをして繰り返していくものなんですね。もう一つ、僕達がいま面白いなと思っている、これ奈良マラソンの時のアプリを作ったんですけど、やっぱりマップというのを押すと、これはマラソンの時のコースマップが出てきます。例えば、コース上のとある地点なんかを押すと、何時ごろ通りますよとかですね、救護施設のところを押すと、毛布が幾つありますとか、トイレが幾つありますとかというのが出てくる訳です。これはマラソンだけではなくて、僕は防災マップになるだろうと思っています。一発目のときに、東日本大震災もそうだったように、ツイッターとかフェイスブックが動いたというのを判断すると、まず、この地域はどこの地点に逃げるとか、どこに毛布や食べ物があるとかというのが、その初期の段階で表現できるのではないかなと思って、自治体さんとかには少し、宣伝なってしまうんですけどもやっています。

図書館が古い地図とかを持ってれば、すごく活用があるのではないかなというものがあります。これは伊勢。伊勢ぶらり。これは大学生と行政が一緒になってアプリを製作してくれました。これは鳥瞰図ですね。これは情報が写真しかないんですけども。要は古い写真を見つけたら、ただ単にデジタルアーカイブして、データベースに入れるんじゃなくて、写真から使えるものに変化して、またそれをみんなまちづくりとか、生涯学習とか、それから郷土学習に使いましょというアプリがあるということで、説明終わりです。

ではまた皆さん、それぞれこれだけは昨日言い逃したというのがもしあれば、どなたからでも、どうですか。手塚さん。

○手塚氏

小さなお話なんですけれども、昨日発表が終わった後に何名かにお尋ねいただいたので、お話します。昨日ユニホームを着ておりましたけれども、「男性ユニホームってどんな形ですか」と聞かれましたのでご説明します。男性は同じ素材のベストを着ています。ベストか、腰だけのエプロンというんですかね。そういう形のものを日替わりで。男性職員が１人だけおりますが、その１名が気分によって変えて使っています。

○花井氏

館長は。

○手塚氏

館長は毎日あのような。きょうはシェイクスピアのネクタイを締めております。

○花井氏

館長いつもかっこいいですよね。

○手塚氏

おしゃれなんです。

○花井氏

おしゃれ。そうなんですね。あれ、変な話ですけど着替えもみんな持っているんですか。何着も持っているんですか。

○手塚氏

だいたい２着持っています。

○花井氏

支給？

○手塚氏

町が支給したのが１着で、あと欲しい人は１着自前で買います。

○花井氏

自前で買う。いいですね。僕らはユニホームなかったから。僕、でもユニホームなかったけどコスプレをよくさせられましたね。フック船長になりましたし、いろいろやりました。はい、ありがとうございます。ほか、ないですか。

○奥山氏

地元への希望なんですが、いま県で「読育」ということで、市町村に読書推進計画を作ってくださいというお話があるそうで、それぞれの市町村で作ってらっしゃると思うんですが、ステレオタイプでないといいなと思うんですね。どこ切っても、市の名前とか町の名前が違うだけの読書推進計画だったり、計画のための計画みたいなふうにならないといいと思ってます。というのは我々はどちらかというと、実践を主体としてきてユニークな活動というのがあって、読書シティ宣言自体が、読書推進計画みたいなものでやっていたんですが、ここまで折角ユニークなことをやってきたので、読書推進計画自体を、子ども読書推進というのもいいんですが、市民総合的な読書推進計画という感じで、それも非常にユニークなものを作ってもらいたいなと思ってます。学校の部分はこの人が書いて、図書館関係はこの人が書いて、保育園関係はこうやってというもので、そういうオーソドックスな計画も勿論大事ですけども、できるだけ、らしい、らしさ、特色というのを出していくと、それぞれの市の読書に対する取り組みというのもすごく見えてくると思うし、ここでやることの何が大事なのか見えてくると思います。そんなことを考えていけるような読書推進計画をぜひ作っていただきたいなと思います。

○花井氏

これはまた市の関係者に言っている話ですか。

○奥山氏

全体、皆さんにお願いですね。

○花井氏

両方。

○奥山氏

きっともう皆さんのところで立派なものができていると思うんです。私達の図書館も後発ならではの、いろいろなアイディアあったので、後発ならではのアイディアを活かして、いろいろ作っていくとこれから面白いと思うし、見直しかけられているところも、たぶんたくさんあるんじゃないかなと思うんです。いろいろ拝見するとすごく勉強になるところがあるので、ぜひ。少し時間をかけて計画作ってもいいんじゃないかなと、他所の皆さんのところでどんなふうな推進計画を作ってらっしゃるのか、お聞きする機会があればいいなというのも感じております。

○花井氏

はい。ありがとうございます。そうですね、昨日の交流会でたくさんの方々と皆さんお話してて、横のつながりも、縦も横もいっぱい出てきていると思うので、そういう計画もまた飛び越えてやれば、また楽しくいいものができるかなと思いますね。どうでしょう。西口さんと嵯峨さんは何か言い残したこと。

○西口氏

そうですね、まず二次利用のことで。お金の話になっちゃうんですけども、アーカイブに何点か写真を載せていますと、必ず民間事業者からお問い合わせがあります。そこには私達のアーカイブの特徴として、それが使っていいか使っていけないかということをきちんと許可禁止ということで、書かしていただいているんですけど、許可というのはあくまでも非営利で、学校等で自由に使ってくださいと。利活用について表に出してやっているんですけど。許可しているのはその部分だけなので、商業利用で自由に使っていいよとは一言も書いてないので、必ず問い合わせがございます。私達に全然収入は入らないんですけれども、提供者の方に、こういうふうに使いたいというふうに伝えていますけれど、民間事業者に連絡先教えていいですかということをやって、結構いい収入になってるようです。ある方の写真が２枚希望されて、商売が成立したみたいなんですけれども、その方から電話がかかってきて「西口くんいい小遣いになったわ」。「なんぼでしたん？」って言ったら、「１枚２万円」とか言って。マンション広告とかによくこの町がどういうふうに変わってきたかということをよく写真が載るんですよ。それに使わせてほしいということで。１枚２万円で、４万。なんかそれでちょっと吹っかけて、「なんか区切り悪いなって言うたんや」そしたら、「５万円で」「よっしゃ５万円や」という形で、その方の写真が一番結構売れていたり、今まで４件、５件あって、皆さんそれぞれお小遣いが入っています。本当にタンスに眠っていると、ほんまそのまま眠ったままで、写真がこういうふうに公開されることによって、地域の財産にもなり、自分の財産にもなりはったなということで、よかったよかったと思っております。写真提供していただく時のちょっとしたお話になったらいいなと思います。あと、学校連携の話ちょっと出たんですけれども、豊中も学校連携していまして、高校にも連携を３年ほど試しているということで、事例ということでご紹介しようと思います。

市内の高校何か所かあるんですけども、そのう

ちの１校に熱心な先生がいらっしゃいまして、家庭科の授業ですね、１年生の家庭科の授業で、保育というのがありますので、そこで図書館の司書が、絵本と一緒に、絵本と子育ての話を、高校生に実際本を読んでいます。その後、自分が気に入った絵本を紹介したり、高校生が真剣に絵を描いて、自分が好きな絵本の紹介を書いて、高校で飾るのではなくて、公共図書館の方で飾らせていただいます。「何々高校生、ご推薦の絵本」という形で、ポップが並んで、それを見て、「あそこの高校生がこんなん読んでいるんだ」ということで、また小さい子をもつ親御さんが、その絵本を探しに来きます。高校生に対して何かせなあかんなということで、３年位たったんですけど、うまく回り出しているかなと思います。なかなか高校生忙しいので、足運んでもらえない。授業という形ですけども、また一歩踏み出せて、今後も続けていけたらと思います。ただ市内に５校、６校ありますので、全体でと言われると９クラス行くのに準備が必要です。５校の中で、全部のクラスに回るとなると、かなり職員の負担も大きいかなと思うんですけども。できる範囲で、みんなやりがいを感じています。直接ユーザーと接することができるというのは大きいと思いますので、村山市さんもどうかなと思いまして、ご紹介をさせていただきました。以上です。

○花井氏

嵯峨さんどうぞ。

○嵯峨氏

はい。私は、普段はカウンターの担当ですので、利用者からのレスポンスを日々受けているところです。電子書籍サービスが始って、利用者の方の中には大変な期待されている方がいらっしゃいまして、お話を聞くと「わざわざこのためにタブレット買ってきた。」と、蔵書全部が電子書籍になったようなお話をされる方がいらっしゃって、「実はそうではないんです。」というお話をするとがっかりして帰っていかれる方が何人もいました。山崎副館長はじめ、職員が実現した電子書籍で、利用者の間に挟まって、カウンターが右往左往している状況です。今週の頭にも、「蔵書が少ない」「システムが遅い」「重い」という苦情、いやご意見をいただきまして、「どうも申し訳ございません。」という対応をしてきたところで、本当に利用者の方の期待が大きいと、カウンターで日々対応すると実感しているところで、これからコンテンツを増やしていきたいというのがカウンター職員の切なる願いです。本当に時間と経費の掛かるところではありますが、地道に増やしていくしかないなというところです。

○花井氏

秋田は全国的にも皆さんが期待している、ほかの図書館も期待しているのではないかなと思います。

では、少し質問で、まずはお互い同士にこれはちょっと聞いて帰っときないなみたいな、皆さんの４名の中で。先生にもこれアドバイスないかしらとかありましたら、どなたからでも大丈夫ですから。じゃあ手塚さん。

○手塚氏

はい、村山市の図書館の取り組みで、当館でもやってみたいなと思っていた夜の図書館と、貸し切り図書館というのがありましたけれども、夜にやるっていうことはもちろんスタッフの運営も大変だとは思うんですけれども、それ以外で何か問題点などはありましたでしょうか。

○奥山氏

ご質問ありがとうございます。実は昨日の夜、夜のの図書館状態を情報交換会の後あたりに見て欲しいと思っていたんですが、ちょっとバタバタしてしまって、お願いをしておかなかったので残念でした。

夜の図書館、そうですね。普段よりも長くいて、夜までいるというので、スタッフは大変なんですが。本当に自画自賛で申し訳ないんですけど、うちのスタッフは本当に頑張り屋さんがそろっているので、「遅遅番（おそおそばん）でいいです」って、気持ちよくやってくれるんです。早番の人は、８時半から来る。遅番の人は10時半に来る。夜の時は、遅遅といって「お昼ご飯食べてから来てね」みたいな。「本当に遅遅でいい？」なんて聞くと「いいです。僕やりたいです」とか「私やります」とか本当に気持ちよくみんなが勤務してくれる状態でした。勤務面に関しては全く心配なく、本当にありがたいことだなと常に思っていました。ほかの問題というのは、やっぱり夜やるということで、例のあの震災の時に「節電、節電」と言っているのに、電気をつけて夜やるというのはいかがなものかと、一般市民からお叱りを受けたこともありました。でもその日ちょうど、甑葉プラザの中でも鎮魂のイベントをやる計画もあり、逆に我々は、夜の図書館一度おいで下さい。電気の光量も全く少ないです。薄暗い、部分的な書架照明だけでやりますと申し上げました。それに加えて、お家の電気を消して、図書館で家族で読書しましょうと、呼びかけさせていただいたのでした。季節に１回ですから、イベントとしてお待ちになってる方もたくさんいらっしゃいます。普段は夜７時までやってる、土日もやってるといっても来れないんですという方が、夜の図書館の時だけは、「パパに子ども預けて来れたんですよ」ってすごく喜んでくださる方もいます。３時間のんびり過ごせましたって。それにちょっと薄暗いところって、気持ちがいつもと違いますよね。ファンがたくさん待って下さってるということに支えられ、継続しています。

今まで発表してきた事業も、全く好意だけをもって迎えられているとは、私達も思っていません。物事のこちらから見る人もいれば、逆から見る方もいらっしゃる。でも、基本的な考え方は、１冊でも多くの本を皆さんに手に取っていただきたい。その機会を作りたい。そのためだったら私達はどんなことでも面倒と思わず「おもてなし」をやっていきたいという気持ちです。それを理解していただいたのか、だんだんと「夜をやめろ」という声は聞こえなくなってきております。夜はカフェとして、お茶、職員やボランティアさんの手作りのお菓子。あとはこの辺の学校のＰＴＡの関係の人にお願いをして、飲み物やジュースを提供しました。図書館の中での飲食はいかんとの意見も若干ありますが、その日だけと受け入れていただいてます。

また、貸し切り図書館ですけど、やはり貸し切りという状態で、最初は興奮状態の小学生が走り回る。親御さんの感想の中にも、「図書館の中で走り回る。親自体がもう嬉しくてしゃべり合っている。親子で読書っていうその基本的な考えはどこにいったんですか」というご感想もたくさんいただきました。その通りだと思います。あまりにもひどい騒音のような話し声。しかも、子どもの声より親の声の馬鹿デカさが問題だと私達も思っていました。ただ、「まだやってほしい。また夜の図書館行きたい」という声に後押しされ「もう少しやっていきましょう」ということで、今は担任の先生方も参加するようになって環境改善され、継続は力なりというのをだんだん実感してきましたね。

貸し切り図書館のところで、もう一つ、朝の貸

し切りもあります。近くの子ども達は夜でも来れますけど、遠くの子ども達は親に連れてきてもらわないと行けないし、「学校で活用を」って言っても、夜はとっても無理と。それで「では朝の貸し切りいかがですか」って提案しました。「開館前で整理も半端ですけど、準備の職員と一緒に９時から１０時まで貸し切り出来ますよ」と言ったら「本当にいいんですか、ぜひ！」ということで、午前中に、１時間だけの貸し切りをしました。そこから開館時間を経て、大人の利用者と子ども達が一緒に静かに本を読むということを喜んでいただきました。職場の利用も出来ますが、これはまだＰＲと認識不足、貸し切りはなかなか増えていかないところです。

○花井氏

　では、昨日いただいた質問があって、２つ僕に来ているんで、時間もないのでお答えします。小布施の小布施百選。小布施人百選というのがあるんですが、それとＤＶＤの話をもう少ししていただきたいということになっています。

どういうことを詳しく言えばいいのかがちょっと難しいんですが。小布施人百選というのは、文字、テキストデータにして、ｉＰａｄの中でＰＤＦにしているので、それで読んでいただいているというのが一つです。あと、ＤＶＤにしているのはセミナーとか、こういうイベントですね。シンポジウムとかも全部撮影しますので、その撮影したものをちょっと一人が担当していますので、数か月遅れてなんですが、ＤＶＤのコーナーがあって、そこにずっとやります。図書館が主催するものがあれば、小布施町役場がするもの、あるいは商工会、いろんな団体さんが講師の先生を呼んできてやるんですけども、まず講師の先生に交渉するのは、その主催者である人達がやると。そして撮影は図書館がするということでやっていました。そこに対して予算はくれないんですね。僕ら撮影しているのに中々くれないですけど、「くれ」って言う時もありますけどくれない。でもそれでも僕達は資料をいただけるというので、とりあえず満足して、それを皆さんに、お客さまに提供しているという流れがあります。あとは、今いろんなところにあると思うんですけど、九条の会というのはありますよね。九条の会は、小布施町にもありまして、九条の会さん達が戦争体験者のお話し会をされるんで、それを図書館が全部アーガイルしています。それを公開するというよりは、どんどん収集していくということで、公開はいずれだろうとは思いますが、ほとんどの方がもう高齢で、もう明日分かんないぞという感じがあるので、そういう方を逆にイベントがあったら、僕達の方から撮影させてもらえませんかというのを心掛けていて、できれば最終的にはＤＶＤにする。昨日も言いましたけど、結局最後には公開したいんですけど、個人情報とかすごいあるんですね。まちづくりにすごい頑張った人達がしゃべってくれることは、自分が病気になってからのこととか、自分が何かのきっかけになるときは、すごい個人情報的なことからまちづくりに入られている人が多くて、それを中々この現代で一緒に公開するのは難しい。でも 100 年、200 年後。その時はまたメディアは変えなきゃいけないんですけども、その時に、この人がいたから今のこの道路ができているとか、この建物があるとか、そういうのを知ってもらうためには、やっぱり取っておくというのが僕は必要じゃないかな。いま公開して何か問題起こすのではなくて、歴史的な人物になるころに紐解いていただくというのが、一つの僕達図書館がやることかな。よく僕の言葉で言っていたんですけど、僕もその当時は、５年だけ公務員になりましたが、公務員の仕事というのは、いま生きている人達へのサービスと、これからいる未来の人達へのサー

ビスの責任があるはずだと伝えていたんですね。それが今一つのＤＶＤとか、そういう記録を作っていく、アーカイブと作っていくというのが未来への責任かなと思ってやっておりました。

もう一つですね。張り紙を少なくするとか、空間を、時間をシェアするとか、一般席を排除するとか、いろいろ僕が昨日言ったことに対して、中々お客さまに理解されなくて、苦情が多いという質問なんですけど、それはいろいろ考え方があると思うんですが、僕らは交流と想像を楽しむ文化の拠点という理念でやっているからこれを言えるんですね。交流するためにやっているから、ここはシェアしてくださいとか、席もみんなで決めないでみんなが各々譲り合ってください。鞄を置いていたら、鞄をどけて、誰かが座れるようにしてくださいとか、理念あってのこの考え方です。だから、もしこの書かれた方ちょっとお名前載ってないんですけども、理念が違うものであれば、それはそれで務めていっていいと思いますけども、ここに書かれている苦情を言う人達は、僕達の図書館であれば、理念でいろいろやっていくと、それは僕達にとってはわがままになります。これはあなたがわがままを少し強く言っているんではないですかになってしまう。それは直接お客さまには言わないですけども、そういうふうになってしまうので、そこは丁寧に、そこをシェアしてくださいとか、交流と想像の文化の拠点としてご理解いただきたいとか、そういう理念をまず説明しています。だから、僕がいる時のスタッフは全員理念を言えるように、その理念を説明しないと、なぜこういう運営をしているのかが、説明できないと思う。とはいえ、私達もずっとそういうお叱りは受けていました。受けていましたけど、理念、理念、理念で、全部押してきていますので、少しは苦労はあると思いますが、もう一度その理念、昨日探してきてくださいねと皆さんにはお伝えしたんですけども、その理念と運営方法を考えていただければいいのかなと思いました。

それともう一つは、奥山さんの方かな。村山の方に質問が来ていて。ちょっと質問から一緒にお願いいたします。

○奥山氏

はい、お一人からたくさんのご質問いただきました。

「読書シティをスローガンにしている村山にしては、まだまだ蔵書が少ない気がします。」全くその通りです。これからだんだん増えていくと思います。

「学校図書と協力することを強く希望いたします。」学校図書館とは、先ほどもお話しした平成１５年から連携会議というご意見を頂戴する機会を設けております。また、全小学校に移動図書館を運行しております。まだまだ足りないところがあれば、質問書にお名前がなかったので、ぜひ具体的にここのところのこの部分をということで詳しいお話をお伺いしたいと、担当者は思っていると思いますので、後ほどよろしくお願いします。

「村山市周辺の図書館に依頼し、ブックトークを各学校で行ってもらっているのが現状です。」と書いてあるんですが、お互いに各市町村の優秀なボランティア団体というのは、ブックトークだったり、読み聞かせだったり、依頼があれば近隣市町村にどんどん出かけています。村山市のボランティア団体も、東根や大石田、遠くは山形まで出かけてお話し会や人形劇をやっています。お互いにこうやってコラボレーションして、できないところは近隣の市町村がお互い補っていける団体が近くにがあるというのは、非常に素晴らしい関係だと思います。これからもお互いにコラボしていただければ、ありがたいと思います。

「まちづくりも重要ですが、子ども達の心を育

てることが重要です。」全くその通りだと思います。人づくり、やはり昨日も申し上げたんですが、小さい子どもに絵本をあげる。喜びを感じて、子どもの時から本を読む大人を作るというのが、読書シティ村山のまちづくりの理念です。

「今おこなっている読書活動で、実際に学校の先生方が困っております。」実際にそういったことがあるとすれば、たぶんリクエストなどで丁寧にお答えをしていますから、ぜひそういった声は直接話していただきたいと思います。

「村山市はボランティア活動に元気がありません」とあるんですが、実は昨日の懇親会のご馳走、ほとんど全部ボランティアさんの手作りなんですよ。あと本当にうちのボランティアスタッフ、サポーターといいますが、絵本袋を作って下さったり、夜の図書館でのカフェを手伝ったりとたくさんサポートしてもらっています。この意見はたぶん、そういった場面にたまたま出会ってらっしゃらない方のご意見かなと思います。実際、活動のようすを新聞等にも掲載してもらっていますが、ご存じないとすればもっとオリジナルの情報発信してお知らせする機会も必要なのかな。

ご意見いただくと、我々、漫然として毎日過ごしている訳ではないのですが、一歩前に進むチャンスになりますので、こういった貴重なご意見はもっと直接お聞かせ願いたいと思います。我々も全てがいいと思っているわけではございませんで、たまたま成功した部分もあれば、失敗したのもあります。試行錯誤で活動しています。よろしくお願いします。

○花井氏

はい、ありがとうございます。時間もうちょっとだけ、一人か二人ぐらいかな。ご質問は受けられると思うんですが。この今壇上に山本先生がここまで含めて、どうしてもこれは変え得るためには聞いておきたいといわれる方、挙手を。ちょっと３０秒ぐらいで質問してください。

○女性

山形県の教育庁から参りました。松田と申します。よろしくお願いします。皆さんのお話聞いていて、大変参考になったんですけども、一つ思ったのが、二つの視点があって、まずミクロの視点とマクロの視点ということで、ミクロで言いますと、一人一人との対話を非常に大事になさっているということを感じました。利用者の方の立場に立って、そのおもてなしの心でということは、まさにその通りで、利用者の方が、その図書館を良い悪いというふうに判断するのは、その司書の方とかの一人一人の努力だというふうに思っております。マクロということで言いますと、地域と図書館との連携ということ。これが図書館だけでは、ちょっと難しいことなんだと思います。地域とか企業とか、あとは行政とか、そういうところと連携していかないと、例えば、岩手県の紫波町さんとか、村山市さんというのは、新しい図書館とか、地域の交流施設を作るというのをきっかけにして、いろんな方々が連携をして動いていくという新しい流れがあったと思うんですけれども、山形県の県立図書館とか、あとは秋田県さんとか。そういう既存の施設をどうやって新しい取り組みをしていくかということ、お話し聞いていて、非常にどういうふうな取り組みできるかなとちょっと頭悩ませておりました。みなさんからアドバイスをいただきたいと思いまして。皆さんが普段の取り組みで心掛けていることですとか、あとはそれぞれの施設でキーマンになっている方とか、セールスマンになっている方っていらっしゃると思うんです。何かその連携をする際に、きっかけづくりをしていくとことともすごく大事だと思うんですけれども、それはコネクションづくりだとか、昨日み

たいな交流会をきっかけにして、じゃあ今度一緒にやってみようかみたいな話になるとか現場の声をお聞かせいただければと思います。

○花井氏

はい。じゃあどっからいきましょうか。じゃあ全部。最初は手塚さん。

○手塚氏

はい。そうですね。セールスマンということで言うと、私は司書がセールスマンだと思っています。当館は、私が図書館準備室で、まず町に図書館がなかったところに急に司書として私が採用されて、町の役場の方達も、司書って何？司書ってなんだろう、なんの仕事をしていて、なんの専門能力があるのかというところを、勿論ご存じない方が多くて。こちらの周知不足なのですが。それで私達の方では、図書館は何に役立つのか、司書って何をする仕事なのかというのを、名目としては「行政の資料を図書館では集めています」ということで、各課を全部、依頼文章を持って回りました。そこで図書館はこういう役割がありまして、行政の資料をいただきたいのですという話をしながらも、図書館というのはこういう仕事をしているんですとか、レファレンスという業務がありまして、実際こういうことに役立ちますというお話を、お一人お一人にさせていただきました。これは小さな町だからできることかもしれないのですけども、そうすると全員にではなくとも、そこで「あ、そういったことを司書の人はするんだ」と驚かれます。「行政で調べ物をしていることがあったら、図書館に聞いてもらえればいいんですよ」とお話しをすると、「え、それでは仕事が増えるんじゃないですか」とか、そういう心配をされる。「良いんですか、本当に」っていうこともおっしゃっていただくんですけれども、「いや、それが私達の仕事です、それが結果的に町の人達に役に立つことなんです。だからぜひやらせてください」ということでお話しします。それから町の農林課の方が、子ども達を連れて、歴史の施設を見に連れていくという時も、「あそこにある歴史を説明する時にどういうものなのか分からないから、図書館で調べてもらっていいですか」というような問い合わせが来るようになって、そこから繋がっていろんなお話が、「これは図書館にもお話ししよう」っていうふうになったり、人を紹介してもらったり、そういうことができるようになります。

また、実際図書館に来館するお客さまですね。全員司書というところですけれども、私達はコミュニケーションを一番大事にしています。必ずこちらから話しかけますし、そこでちょっとしたきっかけでお話ししていただいたことを、レファレンスにつなげることもありますし、それを次の企画展示のところでご協力いただけないかという形にし、企画展示もやっています。今は町の人達から、「こういうのを考えているんだけれども、一緒にできないだろうか」っていうふうに、私達がお話して、動いて、コミュニケーション取ることによって、来てくださるようになっているような気がします。

○花井氏

はい、ありがとうございます。どうでしょうか。奥山さん。

○奥山氏

本当にミクロの視点というふうにおっしゃっているのはその通りだなと。司書については紫波町さんと同じです。割と図書館の司書というのは、なんでもオールマイティで対応ができるということをもっともっとお知らせする必要があるんですが、自分達で全部大丈夫です、これも分かります

なんて、実際はなかなか自分達から言えないですよね。でも仕事として司書というのは、そういうものを知っているんですよって。体験的に自分の知識がなくても、司書は皆様を案内できますよということを言わないといけないなって思います。実際にやっている部分では、全く紫波町さんと同じです。

まちづくりと商店街とのカード連携をする時なんかも、やはり人と人の信頼関係を築くところから始め、商店街の方から図書館を理解してもらう。すると、もっと人が来るというふうに、人の持っている力をもっともっと活用していくことが大事だなと感じます。あと、応援してくれる人、理解してくれる人をとにかくいろんなところにたくさん作っていって、何かある時にその方々同士が線になって面になっていくという部分。それがミクロからマクロにというふうな、小さな点でも、複数存在すれば大きく成長していくというのが、３年間の中で感じたことです。

○花井氏

ちょっと時間もなくなったので、西口さんから嵯峨さん、一言ずつ。今の質問だけでなくてもいいです。ここ言い逃したこと。最後、一言お願いします。

○西口氏

一言だけなんですけど、流れの中で、最後質問に答えることになるんですけど、豊中市でも庁内連携というのをちょっと進めてまして、まず、戦略的にまずどこに行くかを練って潰しに行きました潰しに行ったという言い方は悪いんですけど、まず広報行こうと。次、職員研修所行こう。この二つを行きました。その次に、議会事務局。この３つを最初に行こうということで行きました。さらに図書館協議会を上手く使って、図書館協議会で、「庁内連携のことが話題になっています。だからアンケート答えてください。」と部課長会に説明し、図書館のホームページのアンケート機能を使って、各部長あてに URL を書いたメールを送り、回答をおねがいします。と念押しします。そういうやり方をして、理解がある部長、課長がいれば、そこにまたアプローチしていこうと、徐々に徐々に今５年位かけて浸透させていったかなと思っています。いまも職員研修があるたびに、「５分だけ時間ください」と、うちの主任・副館長が、図書館はこういうことができますと説明に行ってます。それでＥ－レファレンスで職場から「こういう資料はないですか」と質問を受けてレファレンスも徐々に増えてきたかなと思っています。中々難しいんですけど、図書館というのは、人を繋ぐ、情報を繋ぐところなので、地道に職員一人一人と対話を繋げながら、続けていきたいなと思っています。

○嵯峨氏

では一言だけ。まず今回のサブテーマ、「情報と交流の拠点をめざして」。私は図書館に入って１２年ほどになるのですけれども、入った当初は、交流という概念をまず聞いたことがなかったです。なんでかなと考えました。やはり、最近まちおこしと言われるようになって、勿論図書館もそれに関わらずにはいられない状況になっていると思います。当館は県立図書館で、設立が明治期からの100 年以上になる図書館ですので、市町村さんよりも小回りが利きにくい面があると思います。交流の原点というのは対話や会話だと思いますが、従来は利用者の方々にてはお静かにと言ってきた立場の人間ですので、中々館の中でも矛盾を抱えているような感覚もあって悩ましいです。ここら辺は市町村さんとは異なる面があるのだろうとは思っています。まだまだ内部での試行錯誤をしてい

るような状況です。本日ご出席の方々に他の県立図書館さんもいらっしゃると思いますが、これは皆さんおそらく日々の業務の中で感じている面があるのではないでしょうか。市町村さんと異なる策を考えなければいけない。カウンター担当しておりますけれど、カウンターの中からも、日々注意するべきか、認めるべきかと考えながら業務している日々です。

○花井氏

はい、ありがとうございました。時間になったので、最後に山本先生、大体全体的なものを振り返らえて。

○山本氏

課題が「情報と交流の拠点」。まさしくそういう時代を迎えているなと実感しました。最初、ご紹介した知の広場。言い換えれば、そういうことかなと思って。ですから居心地のいい、誰でも迎えられる広場であると同時に、それが、これからのまちづくりの情報発信源、あるいはそのきっかけづくりということで、図書館がまちづくりの核になる、そういう働きが具体的にこうして出てきたというのは、非常に心強く思った次第です。この動きが全国的に広がっていくことを願っております。

○花井氏

はい。うまくまとめていただきましてありがとうございました。質問をあまりお受けできない、お一人になってしまったんですけども、もうお時間になりましたので先生の言葉をまとめとして、講演を終わりたいと思います。ぜひ今日楽しかったな、だけではなくて、これをお持ちになって、今日来れなかった仲間の方々と、また上司と、またそこの一番トップとも、できればこういうことになっているという話をまたチャレンジに変えて、やっていただければなと思います。本日はありがとうございました。

＜情勢報告＞

日本図書館協会常務理事　山本　宏義氏

それでは情勢報告ということで、今日は公共図書館のお集まりですので、公共図書館のことを中心に、全国的な最近の動きについてお話をさせていただきたいと思います。

まず全国の公共図書館の今の概況でございますが、2012 年版『日本の図書館』の統計ですと、全国の図書館数 3,234 ということで、都道府県がそのうち 60、市町村が 3,174 ですね。設置率、つまり図書館を持っているか持っていないかということからしますと都道府県は当然 100%ですし、それから市、区では 98.5%、100%に若干欠けていますが、ほとんど 100%に近い。ただ残念ながら町村がまだ 54%ということで、町村部における図書館を普及とすることが引き続き課題ということが言えると思います。それから職員の状況につきましては、全職員、つまり専任、それから最近非常勤・臨時職員、さらに派遣・委託といういろんな形がございますけれども、全部合わせますと 37,424 人。そのうちいわゆる公務員として専任の方が 11,650 人ということで約 31%という、そんな状況がございます。この 2012 年の統計を見た中で一つ、今年大きな変化というのが全国の貸出冊数がここで頭打ちといいますか、ちょっと下降ぎみということですね。過去の統計を見ますと 1965 年以来、全国の図書館の貸出冊数というのは毎年伸びておりました。図書館の数も増えておりますけれども、1 館ごとの利用も増えている。そういう中で増えて

きているわけですが、この 2012 年になりまして、初めてそこが減少しております。１館あたりの個人貸出数も減少しております。この原因は何か？理由は何か？ということは、きちんと分析してはいませんが、私なりに思うのはいろんな電子情報、電子媒体の普及ということが一つ大きな背景として考えられるのではないかと思っております。

それから、もう一つ。公共図書館にとりまして今年大きな動きがあったのは、望ましい基準が 10 年ぶりに改訂されたということがございます。昨年 12 月 19 日に告示をされたわけですが、今回の望ましい基準の改訂というのは 2008 年に図書館法の改正がされました。これは教育基本法が 2006 年に改訂をされ、それを受けて教育関係の法律が全部見直しをされた。その流れの中で 2008 年に社会教育三法すなわち社会教育法、博物館法、図書館法の改正がされたという背景がございます。それから前回、2001 年に告示されたものから 10 年あまり経って社会情勢の変化をうけて改正をされたということですね。内容的には総則、公立図書館、私立図書館という組立になっています。この中で私が思いますのは、活用という点では総則のところが、設置の基本、運営の基本、連携・協力、著作権、危機管理ときちんと整理されました。特に管理運営に関しては基本的運営方針を策定し、それから年度ごとの事業計画を立案、公表し、その実施後、点検・評価をして公表するという、いわゆる経営の原則ですね。図書館の経営の原則が明確に謳われたということは注目すべきことだというふうに思います。この基本的運営方針という話は、昨日お話があったいわゆるビジョンとミッションですね。これはやはりきちんと図書館で作る、持つということだと思います。今回の望ましい基準に照らして各図書館の運営状況を見直す。そして基準に達していないところは、５年以内にそれをクリアできるぐらいの計画を図書館で作っていただく。そういう風に活用できればと思います。

この５年というのは、別にこの基準の中に書かれている数字ではございません。これが告示されたときに、こういう基準は５年ぐらいで見直しをすべきだろうということを、図書館協会として意見を申し上げています。これは教育振興基本計画というのが、10 年の計画ですが５年毎の見直しをされておりますので、そういうことからしても、この５年ごとに運営基準の見直しが必要だろうと私どもは考えておりまして、そういうことを申し上げております。また、この望ましい基準に関しての解説書を図書館協会で今準備をしておりまして、ちょっと予定より遅れておりますけれども、できれば年内にと思って作業を進めております。

３点目が指定管理者の動きでございます。これは毎年、私ども各都道府県の図書館にご協力いただきまして、調査させていただいております。その結果、指定管理者の導入に関して自治体単位で見ますと、全自治体のうちの約 12%で、また、図書館数から見ますと全体の約 10.5%で導入されております。また、社会教育施設や文化施設とかスポーツ施設とかでは指定管理者は公社とか財団がなっていることが多いんですが、図書館に関しては民間企業の方が非常に多い。指定管理者が運営している図書館数が 333 館になりますが、そのうち 240 館は民間企業の方がお受けいただいてるというのが一つの特徴かと思います。

それから４点目は学校図書館のことです。公共図書館と学校図書館というのは、今日の話もありましたように密接な連携を取っているところが多い。子ども達の生活を見ましても、学校と図書館の両方を利用している。そういうことからして学校図書館の状況というのは非常に関心があるところであります。この中で、学校図書館法の改正の動きが出ております。まだ骨子案という形で今年６月に示されたもので、今の状況の中で今国会な

のか、年明けの通常国会になるのか分かりませんが、近々、国会で審議されるのではないかというふうに見ております。骨子案を見ると学校司書を配置するということが謳われたことが一つ特徴です。今まで司書教諭という専門職の規定が学校図書館法でできておりますが、実質的に学校図書館の現場で働いている方達が全国にいらっしゃるわけです。その人達の位置付けが今までは学校図書館担当事務職員という、法的にはそういう位置付けであったものが、学校司書という形で図書館の仕事に専念する、そういうものを法的に位置付けようという内容を含んでおります。ただこの骨子案だけを見ますと、果たしてそれが専門的な資格を持った人が常時専任で配置されるのかといったことについては、この文面でははっきりしないわけです。ただ、関係者の間では学校司書はちゃんと資格を持った人、そしてちゃんと専任で働いてもらえるような人ということが担保されるような内容を、法改正の中で示してほしいという要望がなされております。

５点目が電子書籍の動きで、昨日の事例報告にもありましたが、各図書館で電子書籍の貸出をする動きがありますが、今年９月段階ではまだ全国で 17 館ということで必ずしもどんどん広がっているという状況ではありません。これはコンテンツの問題や技術的な問題、また契約の方法とかいろんな課題がある。ただ図書館としては課題を十分受け止めて、取り組んでいかなければならないものと思っております。そういう中で 11 月に福岡で行われる全国図書館大会で、出版流通委員会が「公共図書館の電子書籍導入に関するガイドラインの試案」を示しまして、ご検討いただくというようなことも考えているようですので、そういうことを通して、それぞれの図書館で新たな動きが広がっていくことを、昨日の秋田の事例も非常に素晴らしい事例ですので、そういうのも参考にしていただきながら導入が進んでいくことを期待しているところであります。

それから、デジタル化資料についてですが、２点ばかり話しておきますと、これは絶版になった資料で国立国会図書館でデジタル化されたものが公共図書館等に電子送信されて、そこで閲覧できるという非常に画期的な事業が、この１月からスタートすると聞いております。国会図書館が非常に積極的に電子媒体の活用ということで取り組まれておりますが、その一つとして図書館への公衆送信を通しての提供という、これは絶版本という限定はございますけれども、逆にいうと絶版になった本というのは各地の図書館では見ることができないことがありますので、非常に有効な手段かなと思っています。もう一つは図書館協会との連携ですが、アメリカの目録規則が少し前に RDA という電子情報を一括した目録規則に変わったんですね。そういうことを受けて日本でも目録規則の改訂が必要だというふうに言われていまして、この作業を国会図書館と日本図書館協会と協力してやろうという、そんな動きがございます。

あとは東日本大震災についても、関係の団体の方々それから地元の三つの県立図書館の方との情報交換会をさせていただいておりまして、これらを通して常に状況を把握し、そして図書館協会がやるべきことについて取り組んでいっているということを一言申し上げておきたいと思います。

最後に図書館協会自身の話でございますけれども、昨年来、いろいろご心配をおかけしてきたところでございますけれども、ようやく８月に公益法人の認定の申請を行いまして、今のところははっきりしたことはまだ言えませんけれども、年内には認可がおりるのではないかという見通しを持っています。この公益法人といいますのは、今まで社団法人日本図書館協会ということで、いわゆる社団ですから、会員のための活動というのが主

体であったわけですね。これが公益法人となると事業を行うのが図書館協会でありますが、その活動の成果は国民全部に還元される、そういう活動が求められているということで、大きく事業の取り組みの姿勢が変わっていきます。それから協会の運営自体についてきちんと情報提供し、運営状況を明らかにしながら運用を行っていくということが求められている、そういう時代を迎えているということでございます。以上、最近の公共図書館を取り巻く状況についてご報告申し上げました。